

# 日本バレーボール学会 第22回大会

## プログラム・抄録集

テーマ

『2016 リオ五輪を総括し、2020 東京五輪を考える』

2017年3月11日(土) 12日(日)

国土舘大学

主 催：日本バレーボール学会

主 管：日本バレーボール学会 第22回大会実行委員会

共 催：日本バレーボール協会 指導普及委員会

## 目 次

日本バレーボール学会 会長挨拶 .....	1
日本バレーボール学会 第22回大会 組織委員会・実行委員会 .....	2
これまでの歩み .....	3
国士舘大学 世田谷キャンパスへのアクセス .....	5
参加者へのお知らせ .....	7
一般研究発表者へのお知らせ .....	8
一般研究発表者へのお願い .....	9
第22回大会 日程 .....	10
タイムテーブル .....	12
特別講演 .....	13
基調講演 .....	14
シンポジウム .....	16
一般研究発表 抄録 .....	23
オンコートレクチャー .....	46
入会案内 .....	48
広告協賛企業一覧 .....	49

## 会 長 挨拶



日本バレーボール学会 会長  
(静岡大学)

河 合 学

### 日本バレーボール学会第22回大会の開催にあたって

日本バレーボール学会第22回大会が、ここ国士舘大学世田谷キャンパスを会場として開催されますことは、日本バレーボール学会会長としてこの上ない光栄であり、開催に向けてご尽力をいただきました関係各位には心より厚く御礼申し上げます。

昨年の2016リオ五輪は政情不安と準備の遅れという報道に接して開催の不安を感じていたものですが、いざ蓋を開けてみれば素晴らしい運営と各種競技での熱戦に、テレビに釘付けになったものでした。本学会理事にもブラジルまで観戦に行かれた方が複数いますし、その一人がニュースレターでバレーボール会場の様子を報告しております。その中でも触れています通り、大会運営と熱戦そのものは素晴らしかったのですが、こと日本女子チームにおきましては残念ながら検討むなしく予選敗退となりました。しかも、実力を出し切ったの敗退ならまだしも、本来の力を出し切る間もなく負けを重ねてしまったという報告は、我々にも大きな衝撃を与えました。本学会は勝つことだけを目的にしているのではないとはいえ、科学的研究からバレーボールの発展をはかり、バレーボールの実践に資するという目標を持っている以上、何らかの形で日本の強化に関わっていかなくてはいけないと考えています。そこで、リオ五輪の結果を受けて開催されます本大会は、「2016リオ五輪を総括し、2020東京五輪を考える」というテーマのもと、日本のバレーボールの強化の中心となる方々をお招きして日本の今後の強化の在り方を考察する機会を作ることになりました。また、その一環として日本バレーボール協会の木村憲治会長には2020年東京五輪、いや、さらに先を見据えた2050年構想を講演いただけることにもなりました。2020年に向けての活動が本格化しつつある今だからこそ、本学会と日本バレーボール協会がお互いに協力しあって日本代表の強化を模索できることは感慨深いものがありますし、それが日本におけるバレーボールの普及と発展に繋がっていくことを期待してやみません。

結びに当たり、開催を快く引き受けてくださいました国士舘大学関係者と実行委員の皆さま、そして講師として講演を引き受けてくださいました諸先生には厚く御礼を申し上げ、会長の挨拶といたします。

# 日本バレーボール学会 第22回大会 組織委員会・実行委員会

☆大会会長：河合 学（日本バレーボール学会会長・静岡大学）

## ☆組織委員会

委員長：黒川貞生（明治学院大学・JSVR 副会長）

副委員長：古澤久雄（かのやスポーツ研究所・JSVR 副会長）、石手 靖（慶應義塾大学・JSVR 理事長）

委員：（JSVR 理事）板倉尚子（日本女子体育大学）、内田和寿（京都光華女子大学）、小川 宏（福島大学）、金子美由紀（名城大学）、川田公仁（つくば国際大学）、黒後 洋（宇都宮大学）、小林 海（目白大学）、篠村朋樹（木更津工業高等専門学校）、杉山仁志（武蔵丘短期大学）、高根信吾（常葉大学）、高野淳司（一関工業高等専門学校）、高橋宏文（東京学芸大学）、田中博史（大東文化大学）、鳥羽賢二（びわこ成蹊スポーツ大学）、中西康巳（筑波大学）、布村忠弘（富山大学）、橋本吉登（三ツ境整形外科）、濱田幸二（鹿屋体育大学）、廣 美里（名古屋学院大学）、松井泰二（早稲田大学）、安田 貢（山梨学院大学）、湯澤芳貴（日本女子体育大学）、横矢勇一（大東文化大学）、吉田清司（専修大学）

監 事：柏森康雄（大阪体育大学・JSVR 監事）、廣 紀江（学習院大学・JSVR 監事）

## ☆実行委員会

委員長：横沢民男（国土舘大学）

副委員長：飯田周平（国土舘大学）、吉田清司（専修大学）

事務局長：竹川智樹（国土舘大学）

会 場：○増山光洋（中央学院大学）、小林海\*（目白大学）\*企画委員会

会 計：○竹川智樹（国土舘大学）、田中博史（大東文化大学）、板倉尚子（日本女子体育大学）、高根信吾\*（常葉大学）\*事務局長

庶 務：○松井泰二（早稲田大学）、湯澤芳貴\*（日本女子体育大学）\* 総務委員会

受 付：○飯田周平（国土舘大学）、廣 美里（名古屋学院大学）内田和寿\*（京都光華女子大学）\*企画委員会

記 録：○篠村朋樹（木更津工業高等専門学校）、小川 宏（福島大学）横矢勇一\*（大東文化大学）\*編集委員会

涉 外：○鳥羽賢二（びわこ成蹊スポーツ大学）、杉山仁志\*（武蔵丘短期大学）\*渉外委員会

研究審査：○黒川貞生（明治学院大学）、橋本吉登\*（三ツ境整形外科）、石手 靖（慶應義塾大学）、

高野淳司\*\*（一関工業高等専門学校）、布村忠弘\*（富山大学）\*企画委員会、\*\*編集委員会

（○印：責任者、\*印：各委員会選出担当者）

## これまでの歩み

回	年月日	内容	開催場所
第1回	1996年 5月26日	内外バレーボールの動向と今日の課題 バレーボール史抄 日本における6人制バレーボールの原点	早稲田大学
第2回	1997年 3月22日	発展途上国のバレーボール政策と現状 21世紀を目指したコーチング	早稲田大学
第3回	1998年 3月28日	温故知新—歴史に学ぶ ルールを考える	早稲田大学
第4回	1999年 3月21日	'98バレーボール世界選手権を語る ・一般研究発表 ・コミュニケーション・アゴラ	早稲田大学
第5回	2000年 3月19日	バレーボール発展のための企業チームからの提言 ・一般研究発表 ・コミュニケーション・アゴラ	早稲田大学
第6回	2001年 3月18日	21世紀のバレーボールの在り方を考える ・一般研究発表 ・コミュニケーション・アゴラ	早稲田大学
第7回	2002年 3月17日	バレーボールは変わるか ・一般研究発表 ・コミュニケーション・アゴラ	大阪体育大学
第8回	2003年 3月23日	日本バレーボール再建へのシナリオ ・一般研究発表 ・コミュニケーション・アゴラ	明治学院大学 白金キャンパス
第9回	2004年 3月27・28日	バレーボール学会の足跡と展望 ・オンコートレクチャー(セッターの系統的コーチング) ・ワークショップ 一般研究発表 ・シンポジウムⅠ(バレーボールの授業展開を再考する) ・シンポジウムⅡ(コーチに要求される資質を再考する)	明治学院大学 白金キャンパス
第10回	2005年 3月26・27日	夢をかなえるバレーボール ・基調講演 一般研究発表 ・オンコートレクチャー	東京女子体育大学
第11回	2006年 3月4・5日	競技力向上のための育成システム ・フォーラム 一般研究発表 ・オンコートレクチャー	慶應義塾大学 日吉キャンパス
第12回	2007年 3月3・4日	次世代バレーボール選手の育成 ・フォーラム 一般研究発表 ・オンコートレクチャー	大東文化大学 東松山キャンパス
第13回	2008年 3月22・23日	ひと、まち、地域を造るバレーボールの魅力 ・フォーラム 一般研究発表 ・オンコートレクチャー	筑波大学 つくばカピオホール
第14回	2009年 2月28・3月1日	ジュニア育成のために…!わかりあえる仲間づくり ・基調講演 一般研究発表 ・特別講演 一般研究発表 ・オンコートレクチャー	夙川学院短期大学
第15回	2010年 3月27・28日	小学校・中学校および高等学校の現場を考える ・特別記念講演 一般研究発表 ・フォーラム 一般研究発表 ・オンコートレクチャー	文京学院大学 女子中学校・高等学校

回	年月日	内容	開催場所
第16回	2011年 2月26・27日	性差を考慮したコーチングを考える ・基調講演 ・特別講演 ・シンポジウム ・一般研究発表 ・フォーラム ・オンコートレクチャー	日本女子体育大学
第17回	2012年 3月3・4日	復興・再生におけるスポーツの貢献を考える ・フォーラムA・B ・シンポジウム ・オンコートレクチャー ・一般研究発表	慶應義塾大学 日吉キャンパス
第18回	2012年 2月23・24日	世界トップレベルから見た日本のバレーボールの 現状と課題 ・基調講演 ・シンポジウム ・フォーラム ・一般研究発表 ・キーノートレクチャー	武蔵丘短期大学
第19回	2014年 2月15・16日	コーチング力を探る ・特別講演 ・シンポジウム ・ワークショップ ・フォーラム ・一般研究発表	鹿屋体育大学
第20回	2015年 3月7・8日	RIO 2016 そしてTOKYO2020へ ～ブラジルに学ぶ～ ・特別講演 ・基調講演 ・シンポジウム ・フォーラム ・一般研究発表	早稲田大学
第21回	2016年 3月19・20日	セッターに求められるスキルと戦術 ・シンポジウム ・一般研究発表 ・フォーラム ・オンコートレクチャー	明治学院大学 白金キャンパス
第22回	2017年 3月11・12日	2016リオ五輪を総括し、2020東京五輪を考える ・特別講演 ・基調講演 ・シンポジウム ・オンコートレクチャー	国士舘大学 世田谷キャンパス

※第1回から第4回までは「バレーボール研究会」として、第5回から第14回までは「バレーボール学会」として、第15回以降は「日本バレーボール学会」として、学会の名称も変化しつつ今日まで継続的に開催してきた。

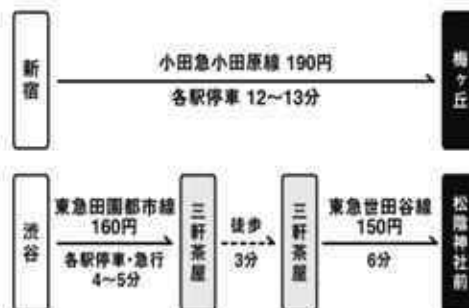
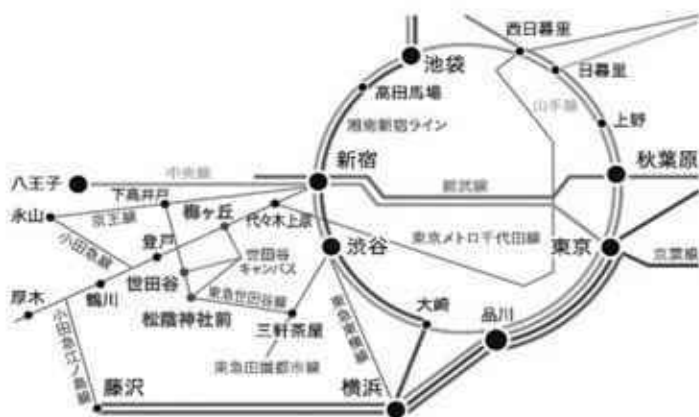
## 国士舘大学 世田谷キャンパスへのアクセス



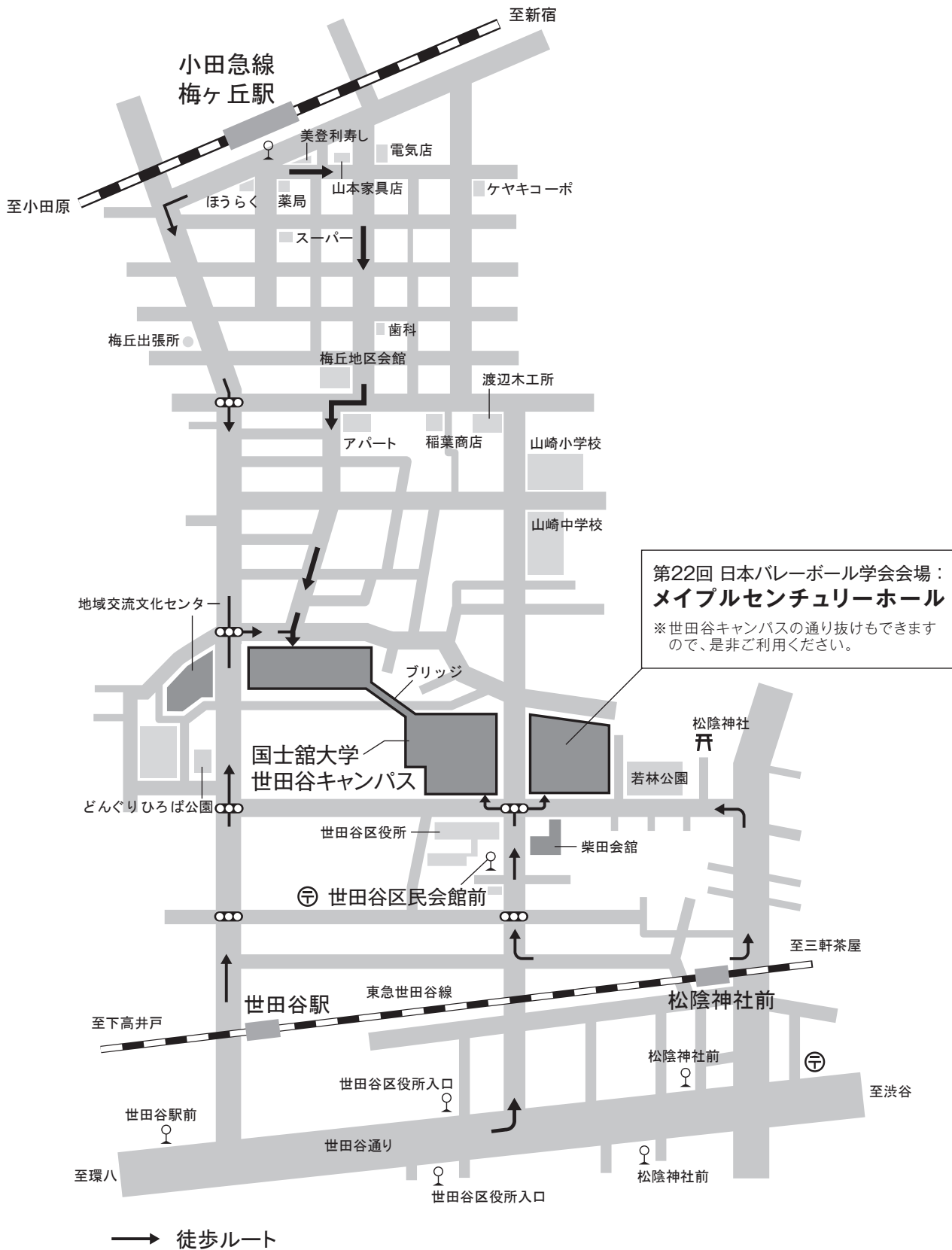
所在地：〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1

### 交通

- ↓ 小田急線梅ヶ丘駅下車、徒歩9分
- ↓ 東急世田谷線松陰神社前駅または世田谷駅下車、徒歩6分
- ↓ JR渋谷駅西口バスターミナル30番乗り場
- ↓ 渋52「世田谷区民会館」バスで終点下車、徒歩1分



## 会場案内図





## 参加者へのお知らせ

- 1) 学会参加者は事前登録、当日登録ともに参加受付を行ってください。第1日目は12:30～、第2日目は9:00～、両日ともに学生ラウンジにて行います。受付では、受付、大会参加費の支払い、ネームカード及び領収書の受け取りを行ってください。事前登録を行い、既に大会参加費をお支払いの方はネームカードと領収書を受け取ってください。ネームホルダーは所属・氏名をご記入いただき、会場内において必ず着用してください、なお、1日目に受付を済まされた方は、2日目に再度受付をする必要はありません。

カテゴリー	参加費（事前登録）	参加費（当日登録）
学会員（一般）	4,000円（2日間）	5,000円（2日間）
学会員（学生）	無料	無料
非会員（一般）	2,500円（1日）	3,000円（1日）
非会員（学生）	1,500円（1日）	2,000円（1日）

- ※ 学生（大学生および大学院生）として参加申し込みされた方は、当日、受付で学生証の提示をお願いします。但し、高校生以下は無料（大会プログラムも配布）です。
- ※ 小・中・高校の指導者の方は必ず事前に事務局へ御連絡ください。また、当日参加については受付に申し出てください。本学会大会の開催趣旨から参加費無料と致します。
- ※ ビデオ撮影、講演録音及び講演中のSNS等への投稿は厳禁と致します。ただし、取材等に関しては、受付にて申請し、その許可を受けてください。

- 2) 日本バレーボール学会の年会費を未払いの方は、年会費をお支払いになり、領収書をお受け取りください。
- 3) 学内の建物内は、すべて禁煙となっています。喫煙される方は定められた喫煙所をご利用ください。
- 4) 会場は、メイプルセンチュリーホール大教室、アリーナにて行います。
- 5) 昼食は、学内食堂が営業しておりません。弁当をご持参頂くか、最寄り駅近くでお済ませください。
- 6) 情報交換会を3月11日（土）18:00～梅ヶ丘校舎34号館10階「スカイラウンジ」にて開催します。

## 一般研究発表者へのお知らせ

- 1) ポスターパネルの大きさは横 90cm, 縦 140cm となります。ポスターの貼り付けは事務局で準備した両面テープを使用してください。両面テープは受付に準備してあります。
- 2) ポスターパネルには受付番号を記しておきますので、ご指定のパネルにポスターを掲示してください。
- 3) ポスターの掲示は3月11日(土)の受付後すぐに行い、12日(日)12:40までのポスター発表終了まで掲示した後、撤去をお願いします。パネル片付け時に残っていたポスターは事務局で処分します。12日(日)のみの参加者は、発表時までに掲示をお願いいたします。
- 4) ポスター発表の時間は3月12日(日)9:30~11:30になりますので、その時間帯はポスターの前に待機し、質問者に対しての対応をお願いします。
- 5) ポスターは上部20cm程度の幅に題名と演者名を記し、それ以降は自由な形式で作成してください。
- 6) 配付資料がある場合は資料を50部程度ご持参ください。なお、大会当日事務局においてコピーのサービスは対応できませんので予めご了承ください。

## 一般研究発表者へのお願い

機関誌掲載用抄録の提出：一般研究発表の抄録を機関誌『バレーボール研究』に掲載します。別紙『機関誌掲載用抄録作成要領』に従い抄録を作成し、『機関誌掲載用抄録\_氏名』とファイル名を付け、メール添付にて、2017年3月31日（金）までに事務局（jsvr22@kokushikan.ac.jp）へ送信してください。

### ◆送り先

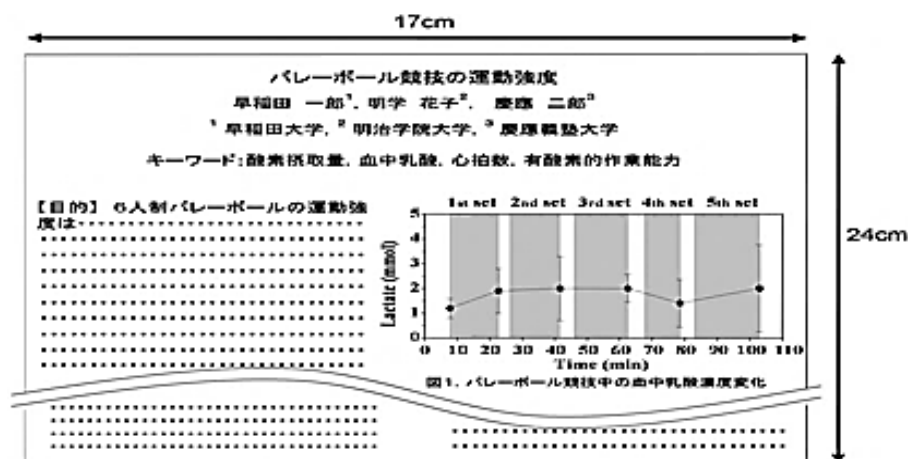
日本バレーボール学会第22回大会 事務局

〒206-8515 東京都多摩市永山7-3-1 国士舘大学多摩キャンパス第56研究室

TEL：042-339-7302（直通） E-mail：jsvr22@kokushikan.ac.jp 担当：飯田 周平

### ◆機関誌掲載用抄録作成要領

- 1) A4用紙（白）1ページ（印字範囲：縦24cm×横17cm）を用い、必ずワードプロセッサ（10.5ポイント明朝体）で作成すること（下図参照）。
- 2) 形式：演題名，演者名，所属機関名，内容要旨を範囲に収まるようにまとめること（下図参照）。
- 3) 演題名は最上段の1行目または2行目を使用すること。副題がある場合は行を改めること。演題名は12ポイント太字とする。
- 4) 演者名，共同研究者名および所属機関名は4行と5行を使用すること。演者名の前に○印を付けること。所属機関名は演者ならびに共同研究者を列記した後，改行して記入し，所属機関名の左肩に記入順に番号を付けること。
- 5) 演者および共同研究者の所属機関は，演者および共同研究者の右肩に所属機関の番号で表示すること。
- 6) キーワードを6行目に2～5語記入すること。
- 7) 抄録内容は7行目から記入すること。目的，方法，結果，考察，結論の順でなるべく項目別にまとめること。ただし，フォーラム・セッションで発表した演題については，そのまとめ方は上記の形式にとらわれることなく自由とするが，発表内容，ディスカッション内容を含めてまとめる。
- 8) 図，表および写真を掲載する場合でも必ず本文枠内に収めること。
- 9) 図および表は原稿用紙に直接作成するか，白色または薄青色の方眼紙に黒インクで作成して原稿用紙に貼り付けること。写真はスキャナーで取り込み，原稿用紙にコピー&ペーストするか，写真そのものを原稿用紙に貼りつけること。なお，説明文の文字の大きさにも考慮すること。



機関誌掲載

## 第22回大会 日程

テーマ：『2016 リオ五輪を総括し、2020 東京五輪を考える』

第1日 2017年3月11日（土）

12:30～ <受付開始>（メイプルセンチュリーホール入口）

13:00～13:15 <開会の挨拶>（メイプルセンチュリーホール大教室）

横沢 民男氏（日本バレーボール学会第22回大会実行委員長）

河合 学氏（日本バレーボール学会会長）

総合司会：横矢 勇一（大東文化大学）

13:15～14:00 <特別講演>（メイプルセンチュリーホール大教室）

テーマ：建学の精神と大学の社会的責任 - 国士館 創立100周年を迎えて -

佐藤 圭一氏（国士館大学 学長）

14:15～15:15 <基調講演>（メイプルセンチュリーホール大教室）

テーマ：JVA2050年構想

木村 憲治氏（公益財団法人日本バレーボール協会会長）

15:30～18:00 <シンポジウム>（メイプルセンチュリーホール大教室）

テーマ：2016 リオ五輪を総括し、2020 東京五輪への強化を考える

司 会：黒川 貞生（明治学院大学）

シンポジスト

矢島 久徳氏（JVA 男子強化委員長）

宮下 直樹氏（JVA 女子強化委員長）

亀ヶ谷 純一氏（JVA 指導普及委員長）

宮嶋 泰子氏（テレビ朝日スポーツコメンテーター）

山口 隆文氏（日本サッカー協会技術委員会指導者養成ダイレクター）

18:15～20:00 <情報交換会>（梅ヶ丘校舎34号館10階 スカイラウンジ）

第2日 2017年3月12日(日)

9:00～ <受付開始> メイプルセンチュリーホール入口

9:30～11:30 <一般研究発表 ポスターセッション> (メイプルセンチュリーホール アリーナ)

11:30～12:00 <総会> (メイプルセンチュリーホール大教室)

12:00～13:00 <休憩>

13:00～15:00 <オンコートレクチャー> (メイプルセンチュリーホール アリーナ)

テーマ: 2020 東京五輪を見据えた指導

司 会: 濱田 幸二 (鹿屋体育大学)

講 師: 松永 理生氏 (中央大学男子バレーボール部監督)

15:00～ <閉会の挨拶> (メイプルセンチュリーホール アリーナ)

黒川 貞生 (日本バレーボール学会副会長)

## タイムテーブル

2017年3月11日（土） [第1日目]

時間	メイプルセンチュリーホール 学生ラウンジ	メイプルセンチュリーホール 大教室	梅ヶ丘校舎 34号館 スカイラウンジ
12:30～	受付開始		
13:00～13:10		開会の挨拶	
13:15～14:15		特別記念講演	
14:30～16:00		シンポジウム	
16:10～17:10		ワークショップ	
17:15～17:45		総会	
18:00～19:30			情報交換会

2017年3月12日（日） [第2日目]

時間	メイプルセンチュリーホール 学生ラウンジ	メイプルセンチュリーホール 大教室	メイプルセンチュリーホール アリーナ
9:00～	受付開始		
9:30～11:30			一般研究発表 ポスターセッション
11:30～12:00		総会	
12:00～13:00	昼休憩		
13:00～15:00			オンコートレクチャー
15:00			閉会の挨拶

## 特別講演



国士舘大学 学長  
**佐藤 圭 一**

「第22回日本バレーボール学会」を本学で開催できますことは、大変名誉なことであり、貴学会に関係される全ての方々に衷心より御礼申し上げます。

本年11月、国士舘は創立100周年を迎えます。私は42年前の昭和50（1975）年に国士舘大学に入学しましたが、今の国士舘大学は想像すらできませんでした。恐らく、国士舘大学ほど、世代によって抱くイメージが異なる大学は少ないのではないのでしょうか？ 学会員の皆様のイメージする国士舘大学は如何だったのでしょうか？ 私の頃は、質実剛健とは云え、男ばかりで、世間とは些かの隔たりのある大学でした。

古くから国士舘をご存知の方は、総じて現在の国士舘の変貌に驚かれます。大学のイメージが変わった要因として、創立100周年記念事業の一環として実施された設備・建物の一新があります。また、地元の方々との交流も頻繁に行われています。女子学生の割合も急激に増え、学生たちの服装もカラフルになりました。伝統競技である剣道・柔道・空手・レスリング等に加えて、シンクロナイズドスイミングや新体操などの女子種目が盛んになり、リオデジャネイロ五輪でもメダル（銅）受賞や入賞を果たしております。

他方、変わる国士舘がある一方で、“変わらぬ国士舘”があります。100年来の建学の精神は脈々と継承されています。「国歌斉唱」に始まり、「舘歌斉唱」で終わる入学式では、新入学生が本学の精神的支柱である教育理念「誠意・勤労・見識・気魄」の四徳目を遵守することを誓い合います。更には、「防災教育」「救急救命士」「公務員養成教育」等のカリキュラムを通じて、国士舘の建学の精神である「国を思い、世のため、人のために尽くせる人材『国士』養成」を具現化しています。

本日の講演では、私学の使命である社会的貢献の視点から、本学の役割と責務について触れたいと思います。また、私のバレーボールへの関心は（俄かではありますが）あの“ミュンヘン五輪・男子バレーボール金メダル”で沸点に達しました。全くの門外漢ながら、日本中を熱狂の渦に巻き込んだその“背景（訳）”について、私見を述べさせていただきます。

## 基 調 講 演



公益財団法人日本バレーボール協会 会長

木 村 憲 治 氏

### 〈全日本代表としての主な国際大会出場歴〉

オリンピック- 1968年、1972年  
世界選手権- 1966年、1970年、1974年  
ワールドカップ- 1965年、1969年

### 〈受賞歴〉

1968年度 - 第2回日本リーグ 敢闘賞、ベスト6  
1969年度 - 第3回日本リーグ ベスト6  
1970年度 - 第4回日本リーグ ベスト6、レシーブ賞  
1971年度 - 第5回日本リーグ ベスト6、レシーブ賞  
1972年度 - 第6回日本リーグ ベスト6

東京都世田谷区出身。目黒区立第十一中学校においてはエースアタッカーとして活躍し、都立目黒高校を経て、中央大学に進学。1967年のユニバーシアード東京大会に出場し、金メダル獲得に貢献。1968年に日本リーグの松下電器に入部。

1972年のミュンヘンオリンピックでは金メダル獲得に貢献した。現役引退後は、松下電器のコーチ、監督、総監督を歴任。松下電器産業本社では特品マーケティング本部長を務め、製品市場調査の責任者でもあった。

出身チームのパンサーズジュニアチームのゼネラルマネージャーを務めた。

日本バレーボールリーグ機構の代表理事会長を経て、2015年6月より第10代日本バレーボール協会会長に選出された。

## 2050年構想プロジェクトについて

バレーボールはネット競技の中で唯一、仲間とともに力を合わせてボールをつなぎ、「心をつなぐ」素晴らしいスポーツです。競技として親しまれるだけでなく、人々の交流を促し、健康を増進し、さらには人生に彩りを添える国民的スポーツとして、多くの人々に認められてきました。

しかし、現在はバレーボール競技人口の減少、バレーボール人気の低下、暴力・体罰問題、役員改選での混乱、5期連続の赤字決算等、バレーボール界には問題が山積しており、とても9個のメダルを獲得した競技団体とは思えない状況にあります。

私たちには、輝かしい歴史を持つ日本バレーボール界の文化を受け継ぎ、次の世代につないでいく責任があります。老若男女を問わず多くの人々に「する」だけでなく、「知る」「観る」といった側面からもバレーボールへの理解と興味を持ってもらい、生涯にわたってバレーボールというスポーツに親しむことができるよう導く責務があると考えます。

基調講演では、バレーボールに関わる人たちの明るい将来を見据え、私たちが目指す「在るべき姿」



「在りたい姿」を取りまとめるための「2050年構想プロジェクト」を紹介したいと考えます。

2017年、日本バレーボール協会（JVA）は、日本バレーボール学会（JSVR）と協同し、最新の科学的根拠（エビデンス）を基に編纂された「コーチングバレーボール（基礎編）」を刊行させました。また、今大会のシンポジウムテーマ、「2016 リオ五輪を総括し、2020 東京五輪への強化を考える」のように、JVA と JSVR が双方の理解と協力により、新しい協同体制の足場を議論することは、2050年構想を実現するにあたり、実に画期的な企画と言えましょう。皆様と学会大会で情報共有できることを楽しみにしております。

## シンポジウム



公益財団法人日本バレーボール協会  
男子強化委員長

矢島久徳氏

### 〈経歴〉

1991	第16回ユニバーシアード シェフ ィールド大会出場<選手>	第11回Vリーグ、2008/09Vプレミアリーグ優勝/ 2006/07・2007/08Vプレミアリーグ準優勝
1992~1996	東レアローズ選手	平成20年度天皇杯バレーボール選手権大会優勝
1996.6~1998.5	東レアローズ選手兼コーチ	第54回、第55回天皇杯黒鷲旗全日本バレーボール選 手権大会優勝/第53回、第58回準優勝
1998.6~2003.5	東レアローズマネジャー	
2003.6~2009.5	東レアローズ監督（監督時、準 優勝以上記載）	2009日韓Vリーグトップマッチ優勝

2020 東京まで、約3年半。最終目標の「メダル獲得」のために限られた時間の中で代表チームを効率良く効果的に強化し、現状の問題・中期の課題に対し、具体的な方策を立案・実行していくこと、PDCAを回すことが急務である。

目標達成に向け、「世界レベルを上回る様々なスキルの構築」「日本人の気質にもとづくチームスピリットの醸成」という柱を立て、【心技体知】を備えたチームを目指す。

主要課題は、①世界の列強に伍する技術力・体力の向上②新戦術のデザインと実行③U23以下を世界レベルに引き上げることだ。そこに日本人の気質である、「和＝総合力」を生かし、「伝統・勤勉＝粘り強さ・継続力」を生み出し、異文化を取り入れての創意工夫を加え、強化を推進したいと考えている。

2020 東京への大きな流れを起承転結で表すと、2017年「起」の年：新監督中垣内イズムをチームに浸透させ、目指すべきゴールに向け各選手・スタッフがベクトルを合わせる。2018年「承」の年：前年度の継続を基本とし都度修正をかけ推進する。2019年「転」の年：今までの活動実績を基に新しい要素を加えて深化させる。2020年「結」の年：完成期として、【心技体知】の集大成である「メダルの獲得」に果敢に挑んでいく。

これから代表チームを強化していく上で、バレーボール関係の皆さまだけでなく、他分野の皆さまとのコミュニケーションは欠かすことができない。種々知恵をお借りしながら勝利を目指していく所存である。

## シンポジウム



公益財団法人日本バレーボール協会  
女子強化委員会委員長

宮 下 直 樹 氏

### 〈経 歴〉

2013～2016年（現在） アルバータ大学女子バレーボールチーム — Associate Coach  
2010～2013年 パイオニアレッドウィングスバレーボールチーム—監督  
2009～2010年 カナダウィニペグ大学女子バレーボールチーム&ウィニペグ大学ジュニアクラブチーム —Mentor Coach  
2008～2009年 武富士バンブーバレーボールチーム—コーチ  
2006～2008年 カナダ女子ナショナルバレーボールチーム—監督  
2001～2006年 カナダ女子ナショナルバレーボールチーム コーチ

2002～2006年 カナダウィニペグ大学女子バレーボールチーム&ウィニペグ大学ジュニアクラブチーム — Mentor Coach  
1986～2000年 朝日生命女子バレーボール部—監督（コーチ2年含）  
1996～2001年 朝日生命バレーボール教室—校長  
1979～1996年 朝日生命バレーボール教室—専任講師  
1979～1986年 朝日生命男子バレーボール部選手—主将（セッター）  
1975～1979年 東海大学男子バレーボール部—副将（セッター&レシーバー）

## 『2016リオ五輪を総括し、 2020東京五輪への強化を考える』

リオのオリンピックでは、メダルに手が届かずに残念な結果となってしまいました。私は当時日本バレーボール界に携わって居なかったので、客観的に振り返ることしかできません。ロンドンオリンピックで銅メダルを獲得してから、4年後のリオまでに主軸であるコンロルタワーのセッターと守備の要であるリベロが引退しました。

その強化を埋めるべく、新戦術に取り組んだようですが、機能せずに戦い方が定まらずリオ・オリンピックを迎えてしまったのでは無いでしょうか？ 中国は大型選手の育成に成功し金メダルを取得しました、また、セルビアも同様に選手が国際経験を積み技術スキルを身につけた事で銀メダル獲得となりました。

2020年に向けての強化ポイントとしては、

- 1、意識改革
- 2、体力とパワーアップ
- 3、技術の正確性
- 4、スポーツ科学に基づいた分析
- 5、発掘育成指導

- 1: チームプレーですが、個人の自主性を高める集団となること、チーム競技はとかく人任せとなり、責任転化をしがちである、そこで各個人が自分自身で、責任取るという気持ちを持てれば強くなれると思います。
- 2、外国勢との対戦にあたり身長を伸ばすことはできませんが、5セットをフルに同じスピードでジャンプ力が落ちずに戦える体力作り、また、外国勢を弾き飛ばせるだけのパワーを備える事が不可欠である。
- 3、日本が誇る高度な技術を追求し、緻密なボールコントロール、目標とする場所（ピンポイント）でのバレーを確立させ、ミス無くす事が課せられた絶対的な条件となるであろう。
- 4、試合の分析・映像の活用（外国勢全て）を行い、相手の弱点を探る、また、各技術の動作フォームチェック並びにセンサーを身体に取り付け、ブロックとディフェンスではバレーボールコートでの効率的な動作確認
- 5、全日本シニアを頂点とした、ピラミッド式一貫指導を目指す。小学生低学年からの優しく楽しいバレーボール活動の普及を促し底辺を広げる。一方で、特に優秀な競技者には若いうちに将来全日本で必要となるスキルを習得させる。4年サイクルでオリンピックは開催されますが、若手・ベテラン選手の入れ替えが戦力ダウンとならぬようにする事で、全日本が将来的なオリンピック大会においてメダル獲得し続けていけるであろう。

2020年東京オリンピックは地元開催での利点とそれだけの大きなプレッシャーがかかります。環境面では自国となるベネフィシアルな側面と国民・メディアなどからの期待に応えられる強い精神力、プレッシャーを跳ね除ける自信、意識改革、自立が不可欠で有るかと思います、それらの環境を考えた上でメダル奪還という目標に向けて強化を進めていきたいと思っています。

## シンポジウム



公益財団法人 日本バレーボール協会  
指導普及委員長

亀ヶ谷 純 一 氏

### 〈経 歴〉

明治学院大学 教授  
専門：コーチ学  
日本バレーボール協会国内事業本部委員  
日本バレーボール協会指導普及委員長、  
日本バレーボール協会公認講師  
IFコーチ  
日本バレーボール学会会員

## 「JVA 指導普及の立場から」

キーワード：スポーツリテラシー、グッドプレイヤー・グッドコーチ

日本バレーボール協会は日本におけるバレーボールを取り巻く環境が大きく変化していることを踏まえ、2020年の東京オリンピックの成功はもちろん、その先の未来へ大きく確かな一歩を踏み出すべく目標を掲げている。その一つに「競技人口の増加」がある。バレーボールは若年層の競技人口が減少しているという現状がある。少子化による減少はもとより、野球、サッカーなど、多くのスポーツ種目が選手確保に努力し競技人口を増やしていることもあり、バレーボール以外の種目に魅力を感じる子供たちも決して少なくない。あわせて中学校、高等学校におけるバレーボール指導者の不足とチーム数の減少も目立ち始めている。若年層の人口拡大を目指す施策をはじめ、バレーボール教室あるいは講習会などのさらなる充実に向け、指導者の資質向上と普及活動に一層の取り組みが必要である。

JVA 指導普及委員会は「スポーツ振興法」(1961年)の時代から、いち早く指導者養成に取り組み、1965年には公認制度を創設し、時代の要請に応えつつ、協会独自の指導者を含めて、各種の指導者を養成してきている。現在も日本体育協会との連携を図りながら、指導者養成に関する各種養成・研修事業の充実を努め、延べ5万人を超えるバレーボール関連指導者を養成してきた。一方、スポーツ界で問題となっている体罰や暴力、セクハラなどの不祥事がバレーボール指導の現場でも起きてお

り、指導者の自覚と資質が求められている。指導・チームづくりの根底に流れる負の遺産というべき悪しき指導法を払拭することが真の意味においてバレーボールの発展に繋がることであろう。

スポーツリテラシーという言い方を聞くようになってきた。リテラシーとは英語で読み書き能力という意味があるが、他に与えられた材料から必要な情報を引き出し活用する能力や応用力という意味がある。昨今よく使われている情報リテラシーやメディアリテラシーなどと同様に、スポーツリテラシーとは「スポーツについての情報と知識があり、それを活用する・応用する能力と理解することができる」また、「現代社会においてスポーツは一つのコミュニケーションツールでもあり、人と人を繋ぎ、地域コミュニティの発展にも繋がりうるものである」スポーツをするだけでなく、スポーツの魅力、意義がどこにあるのか、スポーツにかかわる技能や体力を合理的に向上させるための最先端の科学的知識や現代スポーツにかかわる問題を総合的に学ぶことがスポーツリテラシーを身につけるということである。バレーボール指導者、プレイヤーが持つべき資質として浸透させたいものである。

また、文部科学省はこれからのプレイヤー・コーチに求める姿を「スポーツ指導者の資質向上のための有識者会議（タスクフォース）に見ることができる。新しい時代に相応しいプレイヤー・コーチングのあり方を「グッドプレイヤー」・「グッドコーチ」として提案している。

バレーボール界も新たなスポーツ文化の担い手として、新たな理念を浸透させていかなければならない。東京オリンピックに向けて指導・普及と強化は喫緊の課題ではあるが、その先のバレーボールの発展を考えると、時間はかかるが「良い考え方と正しい指導」を持って粛々行っていくことが実は近道なのではと思っている。

小職も含めバレーボールに関わる全ての人達の弛まぬ研鑽を願っている。

## シンポジウム



宮 嶋 泰 子 氏

テレビ朝日 エグゼクティブアナウンサーから2015年2月にスポーツ局コメンテーターに転身。これまで夏冬計17回のオリンピック・パラリンピックを取材、加えて女性スポーツの現場を取材してきた豊富な経験も持つ。「ニュースステーション」「報道ステーション」スポーツ特集では、企画立案・取材・番組制作の全てをこなし視聴者から高い支持を得ている。官公庁・スポーツ関連団体など多くの委員を委嘱されるなどアマチュアスポーツ界を中心にアナウンサーの枠を超え幅広く活躍中。

2015年から日本女子体育大学招聘教授、順天堂大学客員教授となる。

<社外の委員>

文部科学省 政策評価に関する有識者会議メンバー

文部科学省 コーチング推進コンソーシアム委員

公益財団法人日本障害者スポーツ協会 評議員

NPO 法人国連 UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) 協会 理事

公益財団法人日本バレーボール協会理事

公益社団法人日本新体操連盟理事

(主な功績)

\*1992年度日本女性放送者懇談会賞・S J賞受賞

\*2007年12月に放送した1時間番組「そしてボールは空に舞う・金メダリストの難民支援」が国連高等難民弁務官事務所主催の「難民映画祭2009」にて上映される。

(社会活動)

国連難民高等弁務官事務所駐日事務所と横浜市の後援を得て、毎年県立横浜国際高校にて、日本に滞在する難民を対象にスポーツイベント「アジアスポーツフェスタ」を開催している。

### バレーボールをほかの競技や外国と比較して感じること

- ★監督と選手の間を見直す。支配からの脱却。
- ★選手一人一人の自立と人間性の成長。
- ★アスリートは人気商売ではない。勘違いからの脱却。
- ★指導者も選手も海外や過去、他の競技から自ら進んで学ぶ姿勢。
- ★試合の設定、放送、応援などについて。

## シンポジウム



日本サッカー協会 技術委員長  
指導者養成ダイレクター

山口 隆文氏

### 〈経歴〉

1980年～1984年	東京都立清瀬東高等学校 サッカー部監督	2003年～2006年	JFA技術委員、JFAナショナルト レセンコーチ
1984年～1999年	東京都立久留米高等学校 サッカー部監督	2006年～2010年	FC東京U-15むさし 監督
1987年～1988年	国体少年の部 東京選抜コーチ	2006年～2012年	JFAインストラクター
1987年～2006年	東京久留米FCクラブ代表	2011年～2012年	FC東京U-15深川 監督
1989年	国体少年の部 東京選抜監督	2012年	栃木SC アカデミーダイレクター
1994年～1998年	JFA指導委員会委員	2013年～2016年3月	JFA特任理事 JFA技術委員会 委員長（育成）
1997年～2009年	東京都サッカー協会技術委員（指 導部長）	2014年～2016年3月	JFAアカデミー（男子）統括ダ イレクター
1997年～1998年	U-16日本代表 コーチ	2017年4月～現在	JFA技術委員 指導者養成ダイ レクター
1999年～2006年	JFA特任理事、技術委員 （指導者養成責任者）		

### 「2016年リオ五輪を総括し、 2020東京五輪の指導を考える」

2016年リオ五輪には男子チームがアジアを制し6大会連続で出場した。残念ながら女子チームであるなでしこJAPANはアジア最終予選3位で2位以内に入れず出場権を逃した。この時点で2008年から監督を務めた佐々木則夫氏からA監督代表としては初の女性監督になる高倉麻子さんにバトンタッチされた。大きな課題として若手選手の発掘&育成が挙げられたが、2015年U-17 W杯準優勝、2016年U-17W杯3位と、若い選手を伸ばしてきた高倉監督が、なでしこの監督に就任したことでベテラン選手と若い選手の融合に拍車がかかり、2020年東京五輪に向けて期待できる状況になっている。

手倉森率いる男子五輪チームは、アジアチャンピオンとしてリオ五輪に出場し、期待されたがグループリーグ敗退となった。海外選手の招聘やオーバーエイジ選手の融合などのマネージメントの難しさはあったが、日本の良さを前面に出した“JAMAN'S WAY”である、攻守におけるコレクティブさ、連動性は世界でも十分に通用した。課題としては①攻守に仕掛ける意識 ②基本テクニック質の向上 ③ゲームコントロール（メンタルを含む） ③フィジカルなどが挙げられる。

これらの課題克服するためのシナリオを、育成年代からJリーグまで日本全国で共有し、指導できる環境を整えていくことが必要であり、最も重要なことは「世界基準での指導」「本気で日常を変える」ことのできる指導者を養成することだと思っている。



## 一般研究発表 演題番号 No.1

### 同時多発位置差攻撃に対するディフェンス戦略を ディグフォーメーションから読み解く

- ワールドカップ 2015 男子大会 ポーランドチームのデータから -

○渡辺 寿規 (滋賀県立成人病センター), 百生 剣太 (KouKen 株式会社)

【キーワード】 ディグフォーメーション、スカウティング、トータルディフェンス、シンクロ攻撃

【背景】FIVBの「Picture of the Game - 2015」によれば、ワールドリーグ決勝において1本のアタックで終わるラリーの割合が2006年から2015年までに10%ほど低下した、と報告されている。これは、ここ10年ほどの経過で世界男子トップチーム同士の試合において、アタックが「決まりづらくなった」事実を示している。2006年と言えば、現在の標準オフェンス戦術である同時多発位置差攻撃が確立した年である。この攻撃に対抗できる効果的なブロック戦術はいまだに確立されておらず、アタックが決まりづらくなっているとすれば、ディグ戦術が進化した可能性が考えられうる。他方、ディグフォーメーションを解説した資料は少なくはないが、FIVBが指摘する時代の変化を踏まえつつ、現在の世界トップチームが実際の試合でどのようなディグフォーメーションを採用し、どのような効果をあげているのかを検証した報告は存在しない。そのため、いわゆる「教科書どおりの」ディグフォーメーションを採用しているのか、別の方法論を用いているのかは定かでない。

【目的】世界男子トップチームが、アタックに対してどのようなディフェンス戦略を採用しているかを確認し、その効果を検証すること。

【方法】分析対象はワールドカップ2015男子大会、ポーランド対アメリカ戦のポーランドチーム。アメリカが繰り出したレセプションアタック全56本を、1stテンポで攻撃参加したアタッカー人数ならびに、ボールヒットを行ったアタッカーのスポット位置で分類し、各状況でブロッカーとディガーがどのような位置関係を形成しているかを検証した。

【結果】1stテンポで攻撃参加するアタッカー人数が2人（シンクロ2）以下の状況と、3人（シンクロ3）以上の状況で、スパイク効果率に大きな差（0.0%と41.0%）がみられ、ディガー配置にも大きな違いがみられた。シンクロ2以下では、スパイクが打たれたスポット位置に関わらず「教科書どおりの」ペリミターフォーメーションが敷かれていた。一方シンクロ3以上では、スポットB・Cから打たれた場合のみペリミターフォーメーションが敷かれ、他のスポットから打たれたスパイクに対してはコート中央付近にディガーが集まる配置が多く見られた。

本稿では誌面の都合で掲載できないが、当日の発表においては、コート図を用いてポーランドチームの特徴的なディフェンス戦略を解説する。

【本研究のセールス・ポイント】

過去に、同時多発位置差攻撃に対するディフェンス戦略を検証した研究は存在しない。

本研究は、2015年の世界男子トップチーム同士の公式戦を分析対象としており、かつ、エクセルをベースに作成したツールを用いて分析を行っている。専門的なスカウティングツールを必要とせず、誰でも簡単にデータ収集が可能であるため、分析対象チームを増やして情報を収集すれば、今後日本が世界トップチームと戦う上で、非常に有益な情報となりうると考える。

## 一般研究発表 演題番号 No.2

### 宮城県ヤングクラブバレーボール連盟所属クラブの活動調査研究 ～保護者を対象として～

○日野晃希 (NPO 法人 TEAMi), 石丸出穂 (仙台大学)

【キーワード】 日本ヤングクラブバレーボール連盟、「青少年アマチュアバレーボール」、  
「手段的 / 目的的価値」

近年、バレーボールスポーツ少年団（以下、スポ少とする）及び部活動のチーム数・人口減少が顕著であり、特に中学・高校の部員数は平成16年度から平成26年度の10年間に20%以上減少している。この現状を打破する目的を、一つの設立経緯として平成10年に日本ヤングバレーボール連盟（以下、クラブ連盟とする）が組織された。そこで本調査は、衰退するスポ少・部活動に替わりクラブ連盟が青少年アマチュアバレーボールの普及・強化を担う組織になり得る可能性を探る為、宮城県クラブ連盟所属クラブの保護者へ質問紙調査を行い、クラブの活動実態調査の基礎研究とすることを目的とした。その結果①保護者にとって会員との意思疎通の充実度が保護者自身のクラブ満足度に大きく影響している。②活動場所までの片道移動時間が「30分以上」群は「30分未満」群よりも会費以外の月額出費金額が有意に高く、更に送迎負担も有意に強く感じている。③保護者が考える「保護者・会員・スタッフ」3群のクラブの第一獲得目標はそれぞれ「挨拶・礼儀等のマナー向上」、「バレーボールの楽しさを感じる事」、「技術向上・試合での勝利」であり、それぞれ設定する第一獲得目標が異なる可能性が示唆された。これらの結果から以下の考察を行った。①「保護者・会員」2群間コミュニケーションのみならず、意思疎通機会の更なる充実を図る為にスタッフ（部活動顧問）も含めた3群間の相互コミュニケーションを目指す必要がある。②現状の施設利用制度では新規団体の好条件での施設利用は難しい為、社会貢献度が高い団体からの優先利用や、団体性質等（組織・人数等）を加味した施設利用、を柱とした新たな施設利用制度確立を目指す必要がある。③クラブや運動部活動等の青少年アマチュアスポーツの組織の第一獲得目標は「手段的価値」（体力向上・人間形成等）ではなく「目的的価値」（スポーツの機能的特性）を設定すべきであることを、見田の「価値意識の理論」から明らかにした。

今後の研究の方向性は以下の通りである。①宮城クラブ連盟の保護者及び会員への質問紙調査を行い、3群間の第一獲得目標の乖離性について明らかにしていく。②青少年アマチュアスポーツをけん引してきた運動部活動の歴史的変遷及び学校教育活動のリスクの整理を行う。③クラブ連盟発展の可能性を、野球・サッカー・スイミング等他競技のクラブやスクール等から見出していく。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

バレーボールスポ少及び部活動が衰退している中で、両組織に替わり「ヤングクラブバレーボール連盟」が青少年アマチュアバレーボールの普及・強化を担う可能性を有する組織であるかということを検証することは非常に有意義なことであると考えられる。またこれまでクラブ連盟の活動や実態に焦点を当てた各種研究は存在せず、今後の先行研究となり得る可能性を有すると同時に、バレーボール発展に寄与する可能性も有していると考えられる。

## 一般研究発表 演題番号 No.3

### 練習器具を用いたディグのフォーム習得についての研究

○ 徳田雅哉（鹿屋体育大学大学院：曾於市立財部中学校勤務）

濱田幸二（鹿屋体育大学）、坂中美郷（鹿屋体育大学）、高橋仁大（鹿屋体育大学）

#### 【キーワード】 ディグ フォーム習得 練習器具

バレーボール競技に限らず、どのスポーツにおいても基本技能の習得はより高いレベルのゲームを展開するためにとっても重要である。そして、その基本技能習得のためにどのように取り組めばトレーニング効果が得られるか、多くの指導者が試行錯誤しながら苦悩しているのが現状である。

本研究ではJOCジュニアオリンピック第30回全国都道府県対抗中学バレーボール大会に出場するK県中学生女子選手12名を対象に自主製作した練習器具を用いてディグフォームを習得するためにトレーニングを4か月実施し、その成果を映像の比較及び選手自身へのアンケート等において検証した。

4か月間のトレーニング終了後のアンケート結果は、被験者全員(12名)がディグのフォーム習得について練習器具の使用が役に立ったと回答した。その主な理由として「手を前で構えるという意識がついた」「腕を下から上に振ることがなくなった」「肘が前にあるのでボールに早く反応できるようになった」であった。

トレーニング前と4か月間のトレーニング後の映像を比較したところ、上体が起き、肘が下がって構えていた被験者が、肘を前に置き重心を前にして構えるようになった。

したがって、ディグのフォーム習得に練習器具を使ったトレーニング効果があったものと考察される。

肘の位置を体の前方にセットすることによって重心が前になった。合わせて下から腕を振ることが困難なため、ディグにおけるボールコントロールに重要な要素である面づくりが比較的容易になったと考えられる。

練習器具は水泳の補助具を使ってオリジナルに作成したものであるが、使用した選手から「紐の調節機能があったほうがよい」などの意見があった。改良・工夫を加えることによってトレーニング効果が向上するのではないかと考えられる。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

自主製作が可能な簡単な練習器具が、アンダーハンドを用いたディグフォームの習得に4か月で効果が見られたことは、多くの指導者(特に小学校・中学校指導者)に有益であったと考えられる。

## 一般研究発表 演題番号 No.4

### バレーボールのレセプションパフォーマンスと 視覚探索行動の関係に関する横断的研究

○ 古田 久 (埼玉大学教育学部)

【キーワード】 視線配置, 予測技能

#### 【目的】

本研究は、熟達・発達段階(中学, 高校, 大学)別にレセプションパフォーマンスと視覚探索行動の関係を検討することが目的であった。

#### 【方法】

1. 参加者 中学生選手 21 人, 高校生選手 22 人, 大学生選手 21 人の計 64 人。
2. レセプションパフォーマンスの評価 パフォーマンステストと指導者等による評価の 2 つを基に総合的に評価した。
3. 実験課題と視覚探索行動の記録 参加者の課題は、サーブを遂行するサーバーの映像を観察し、サーブボールの落下地点を可能な限り速くかつ正確に予測(4 択)して回答することであった。回答は、バレーボールのハーフコートイメージした反応盤の 4 等分されたエリアの中のボタンを押すことによって行われた。この課題の遂行時の視覚探索行動をナック社製の EMR-8 を用いて記録した。4 回の練習試行と 16 回の本試行を行った。

#### 【結果と考察】

サーバーの動作を 3 つの局面(バックスイング, フォワードスイング, フォロースルー)にわけ、局面ごとに視線配置データを frame-by-frame で分析し、8 つの視対象カテゴリー(ボールやサーバーの頭部など)に対する視線配置時間を計算した。中学生と高校生選手では視線配置が安定せず散らばる傾向にあるが、大学生選手ではボールとサーバーの頭部に視線配置が集中している。大学生と高校生のパフォーマンス上位群はサーバーの頭部に顕著に視線を配置していた。これはサーバーの頭部そのものから情報を取得しているというよりは、この位置に視線を置くことによりサーバーの動作全体から広く情報を獲得し、予測や意思決定に役立っていると推測される。

フォワードスイングとフォロースルー局面においても中学選手は視線配置が安定しない傾向が認められた。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

視線の使い方という観点から、レセプションの効果的な学習と指導に役立つかもしれません。

## 一般研究発表 演題番号 No.5

### バレーボールにおけるショート平行に関する一考察 - 男子トップレベルを対象として -

○五十嵐元 (筑波大学), 中西康己 (筑波大学), 秋山央 (筑波大学),  
西田誠 (筑波大学大学院), 岩沢恭冴 (筑波大学大学院)

【キーワード】 ショート平行、逆モーション、使用頻度

【目的】 現在、男子トップレベルのコンビネーション攻撃は、セッター付近からの速攻と、両サイドアンテナ付近からの平行、センターゾーンおよび、ライトゾーンのバックアタックに、アタッカー全員が攻撃可能なタイミングで同調して助走に入ることで、相手ブロッカーをかく乱する。相手ブロッカーは、セッターがどのアタッカーを選択しトスを上げるか、セッターのフォームやゲームシチュエーション、チームのブロック戦術や事前のデータをもとに判断し、ブロックを試みる。ところで、アンテナ付近での平行による攻撃を予期し、アンテナ付近に移動した相手ブロッカーに対し、アタッカーがアンテナ付近からコート内側に切れ込み、相手ブロッカーを置き去りにするコンビネーション攻撃（以下、ショート平行）が行われることがある。この攻撃は、アンテナ付近からの攻撃と比較して、相手ブロッカーがアタッカー前方からいなくなる可能性を秘めた攻撃である。一方で、コート内側に切れ込むことで、ミドルブロッカーの移動距離は短くなり、ブロック参加を容易にさせる。また、サイドブロッカーがコート中央に切れ込む動きを予知したり、中央からのブロックスタートを徹底している場合、アンテナ付近での平行による攻撃と比較し、複数人でのブロック実施が容易になるリスクを伴った攻撃である。

したがって、ショート平行を行う際には、相手ブロッカーに予期されず、アンテナ付近からの攻撃と思込ませ、ブロッカーがあらかじめアンテナ付近に移動する必要があるような平行と、混在させた状態で実施することが必要だと捉えることができる。

【方法】2013年以降のVプレミアリーグ男子、2015年ワールドカップ男子大会の、実際のゲームデータをもとに、ショート平行と平行のアタック決定率・効果率について比較検討し、ショート平行による攻撃が有効な状況を明らかにすることを目的とした。

【結果・考察】 調査の結果、Vプレミアリーグ男子のレフトショート平行はレフト平行と比較して、決定率、効果率が優位に高い結果となった。ライトショート平行は、決定率、効果率ともに有意な差はみられなかった。ワールドカップ男子では、ショート平行の使用頻度は極めて低い値であった。日本国内男子トップレベルにおいて、レフトショート平行は有効な攻撃と捉えることができるが、世界トップレベルにおいては、さらに詳しい調査が必要となる。

【本研究のセールス・ポイント】

男子トップレベルの試合のデータをもとに明らかにした知見である。

## 一般研究発表 演題番号 No.6

### 大学スポーツの振興に関する原理的考察 —学生スポーツの存立—

○佐藤国正（桐蔭横浜大学）、馬場大拓（JT マーヴェラス）

【キーワード】大学スポーツ振興、日本版NCAA、学生スポーツ

#### 【問題の所在と研究の目的】

2016年度秋季関東大学バレーボール男子1部リーグ戦の6日程が試合会場の収容人数に対して想定以上の来場者が見込まれ、安全面や運営面の観点から無観客試合の決断を余儀なくされた。さて、近年の大学の持つスポーツ人材育成機能やスポーツ資源としての運動部指導者、学生・教員さらにスポーツ施設等は、社会に貢献する人材の輩出、経済活性化、地域貢献等の観点から大きな潜在力を有している。しかし、我が国の大学スポーツを取り巻く環境は、アメリカなどの大学スポーツ先進国と比較するとスポーツ資源等を有効に活用出来ていない実態がある。

本研究では、我が国の大学スポーツの振興に関して原理的考察を展開しながら、学生スポーツの存立について論考したい。今日の大学と学生スポーツさらには大学スポーツの振興の関係性のなかに表出している社会構造を探ってみることとする。

#### 【研究の内容】

文部科学大臣のもとに「大学スポーツの振興に関する検討会議」が設けられ、これまで4度の検討会議が実施され、中間とりまとめ骨子が提示され、大学スポーツの振興について、産官学連携を図りながら展望していく可能性が見出されている。市川昭午が『未来型の大学』のなかで、今日の大学は産業と教育と娯楽の各分野を統合した巨大な複合企業化していると指摘しているとおり、今日の学生スポーツもまた大学経営の充実を図るリソース、スポーツ愛好者へのスポーツ活動の提供の場、競技力向上およびトップアスリートの育成の基地等、複数のベクトルを示しながら、学生に対してスポーツを通じた人格陶冶の場としての存在を見出している。

#### 【まとめと今後の課題】

大学スポーツの振興検討会議で議論は、大学が持つスポーツに関与する人的資源および物的資源を活用し、生産性を向上させ、ビジネスの可能性を期待されている。日本版NCAAの構築は、NCAAの基盤や成立過程さらには地域性や文化性とは異なるが、時代変遷に生じた商業主義化されたカレッジスポーツへの転換であり、大学スポーツ自体がより生産性を高める自助努力が求められ得る。日本版NCAAの構築の議論の原点は、既存の大学が持つスポーツ資源を有効活用するというマーケティングの立場からの大学スポーツの振興であったことを忘却してはならない。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

近年、大学スポーツの振興に関する議論が高まり、産官学連携で日本版NCAAの構築を成し遂げようとの議論が成されている。その事柄について、原初的な学生スポーツの内在的価値に着目して、考察している。さらに、大学スポーツの資源の有効活用が社会変革への可能性を論じている。

## 一般研究発表 演題番号 No.7

### ディグフォーメーションがディフェンスに及ぼす影響に関する検討 - 2015年ワールドカップ男子 アメリカチームのデータから -

○大澤 仁(香川大学 農学部), 縄田 亮太(愛知教育大学)

【キーワード】 ディグフォーメーション, スカウティング

#### 【背景】

FIVBの「Picture of the Game - 2015」によれば, World League finalsにおいて, 1本のアタックで終わるラリーの割合が, 2006年から2015年までに10%ほど低下していることを報告しており, この10年ほどでアタックが決まりづらくなったことを示している. この背景には, アタックに対するディグフォーメーションの進化が考えられる. しかし, ディグフォーメーションを解説している資料は少なくはないが, FIVBの指摘する時代による変化を踏まえた現在のバレーボールチームが, 実際の試合でどのようなフォーメーションを取っており, どのような効果をあげているのかという報告はされていない. そのため, 現在の世界のトップチームが, 所謂教科書通りのディグフォーメーションをとっているのか, それとも別の方法論を用いているのか定かではない.

#### 【目的】

世界男子トップチームが, アタックに対してどのようなディフェンス戦略を採用しているかを確認し, その戦略の効果を検証すること.

#### 【方法】

分析対象は2015年ワールドカップ男子, ポーランド対アメリカ戦のアメリカチーム. 対戦相手のポーランドが繰り出したレセプションアタック全45本を, 1stテンポで攻撃に参加したアタッカーの人数(4人, 3人, 2人, 1人以下)ならびに, 実際にボールヒットを行ったアタッカーのスポット位置で分類し, 各状況においてボールヒットのタイミングで, ブロッカーならびにディガーがどのような位置関係を形成しているかを検証した.

#### 【結果と考察】

1stテンポのサイド攻撃に対して, アタッカーと対角(クロス/インナー)方向に位置するディガーはコート中央寄りに位置する傾向が見られた. その理由として, 1stテンポのサイド攻撃に対しては, ミドルブロッカーのブロックが未完成になりやすいため, その横や上からコート中央に強打されることを警戒し, このような配置になったと推測される. 実際, 軟打ならびにディグが不可能と思われるブロックアウトを除いた1stテンポのサイド攻撃のうち, コート内に着弾したスパイクはほとんどがクロス/インナー方向のコート中央であった(例外は1例のみ)ことから, ブロックと連動したこのシフトは妥当であったと考えられる. 当日の発表においては, コート図を用いてアメリカチームの特徴的なディフェンス戦略を解説する.

#### 【本研究のセールス・ポイント】

先行研究では測定されてこなかったディグフォーメーションを記録し, 集計したことが本研究のポイントである.

## 一般研究発表 演題番号 No.8

### トップカテゴリとユースカテゴリにおける アタック決定率と勝敗の関係の比較

○手川勝太郎（神戸市立大原中学校）、佐藤文彦（株式会社DELTA）

【キーワード】アタック決定率，ユースカテゴリ

#### 【目的】

バレーボールにおける各種成績と勝敗の関係については、いくつか先行研究（箕輪（2001）、佐藤・渡辺（2015））が報告されている。こうした先行研究では、トップカテゴリや大学生といった単一のカテゴリを分析の対象としているが、これらの分析の結果は他のカテゴリにそのまま一般化することはできない。そこで本研究では、トップとユースカテゴリという複数のカテゴリに跨ってアタック決定率と勝敗の関係を分析し比較することを目的とした。

#### 【方法】

FIVB オフィシャルサイト (<http://www.fivb.com/>) より、トップカテゴリは、2009年から2016年までの国際大会（World Championship, World Cup, Grand Champions Cup, Olympic Qualification Tournament, Olympic Games）及び、男子は World League, 女子は World Grand Prix の P-3 帳票, ユースカテゴリは、2009年, 2011年, 2013年, 2015年に開催された男子 U19 と U21, 女子 U18 と U20 の世界選手権の P-3 帳票より、各試合のアタック決定率と試合の結果の関係を分析した。

#### 【結果】

- ・カテゴリ別のアタック決定率の平均値（±標準偏差）の比較男子 WL は  $47.7 \pm 6.7\%$ , 男子世界大会は  $48.9 \pm 7.5\%$ , 男子 U19 は  $42.5 \pm 7.1\%$ , 男子 U21 は  $44.3 \pm 7.7\%$  であった。女子 WG は  $38.4 \pm 7.5\%$ , 女子世界大会は  $40.9 \pm 8.7\%$ , 女子 U18 は  $33.0 \pm 7.9\%$ , 女子 U20 は  $35.6 \pm 8.5\%$  であった。
- ・カテゴリ別のアタック決定率と勝敗の関係の比較トップカテゴリとユースカテゴリが同程度のアタック決定率では、ユースカテゴリの方がトップカテゴリと比較して男女ともに勝率が高い傾向が示された。本稿では誌面の都合で掲載できないが、当日の発表においては、カテゴリごとに詳細を解説する。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

これまでほとんど検証されてこなかった、複数のカテゴリに跨るアタック決定率と勝敗との関連の分析が、本研究のポイントである。  
ユースカテゴリではオフェンスとディフェンスについて守高攻低となる傾向があるデータを示したことが、育成段階の指導において非常に有益な情報となりうる可能性がある。



## 一般研究発表 演題番号 No.9

### ブロックのポジショニングがディフェンスに及ぼす影響に関する検討 - 2014年世界選手権女子決勝 アメリカチームのデータから -

○角力山 淳 (大崎市役所), 百生 剣太 (KouKen 株式会社)

【キーワード】 スカウティング, ブロック

#### 【目的】

現代のバレーボールにおいてブロックは、個人の読みや勘ではなく、チーム戦術として連係が求められる。小林ら(2013)は、相手コンビネーションに対するブロックのポジショニングとその効果を報告しているが、コンビネーションをマイナステンポのMB+もう1人のアタッカーという2人のアタッカーの組み合わせから分類している。しかし、現在のトップカテゴリでは、さらに3人目、4人目のアタッカーも攻撃に参加してくるのが主流である。そこで本研究では、先行研究のコンビネーションを拡大し、ブロックのポジショニングとその効果を検証することを目的とした。

#### 【方法】

分析対象は、2014年世界選手権女子決勝、アメリカ対中国戦のアメリカチームである。この試合での、相手チームのレセプションからのアタックに対するディフェンス(1stトランジション)の状況を対象に、セットアップのタイミングで各ブロッカーが構えるスロット位置(自コートにおけるレフト側から5, 4, 3, 2, 1, 0, A, B, C)を記録し、その組み合わせ(ブロックシフト)のパターンを分類。各ブロックシフトごとに、その効果を検証した。

#### 【結果と考察】

アメリカチームは試合中143本ブロックを試みたが1stトランジションでのブロックは75本であった。ブロックの初期位置は2-1-Aのシフトが最も多く(65本:86.7%)次に3-1-A(5本:6.8%)、2-0-A(3本:4%)、1-0-A、2-1-Bがそれぞれ(1本:1.3%)でありこの試合のアメリカチームのブロックはバンチシフトを採用しているといえる。バンチシフトは両サイドからの攻撃に弱いとされているが、45本の両サイドからの攻撃に対して2枚で近接したスロットで跳んだブロックは34本である。スロット1つ分空いて跳んだのは11本であるが内ディガーがタッチしたものは7本であり、サイドからの攻撃に対しても十分にブロックをそろえる事ができ、たとえブロック間が空いてもディガーを配置することに成功していた。

#### 【今後の課題】

本研究のサンプルは1試合に過ぎないので、今後は分析チームを増やしてデータを蓄積していく必要がある。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

本研究のポイントは、先行研究のコンビネーションの分類を、世界標準に即した分類に修正したところである。

## 一般研究発表 演題番号 No.10

### バレーボールにおけるジャーナリズム —リオ五輪の報道の比較から—

○小田部 剛 (株式会社トレック), 佐藤 文彦 (株式会社DELTA)

【キーワード】 ジャーナリズム, リオ五輪, リオオリンピック, リオデジャネイロ五輪,  
メディア報道

#### 【目的】

バレーボールの試合の結果は1つで, その事実に違いはない. しかし, 出来事のどの側面を社会文化的な価値観に則って取捨選択するかにより, なる事実が構築される」と多々良 (2007) が指摘するように, 同じ結果でも報道される内容は様々である. この社会文化的な価値観を「国」という視点から見れば, 国によってバレーボールの報道は異なり, その特徴は国を映す鏡となるだろう. 先行研究では, 中ら (2015) がオリンピックの報道を国別に比較しているが, バレーボールの報道を研究したものは報告されていない.

そこで本研究では, 2016年のリオ五輪のバレーボール競技を対象に, 日本と諸外国でのバレーボールの報道のされ方を比較することを目的とした.

#### 【方法】

分析対象国は日本, ブラジル, アメリカ, ポーランド, ロシア, イタリアとし, 報道記事については Google アラート機能 (新着コンテンツ検索エンジン) を利用し, 各国の「バレーボール」のキーワードで収集した. 収集期間は, オリンピック開催期間の前後を含む 2016/7/23 ~ 2016/8/31 とした.

#### 【結果】

本稿では, 日本, ブラジル, アメリカについて紹介する. 記事数は日本 (276), ブラジル (122), アメリカ (200) と日本が多い結果となった.

記事を試合の結果のみ報道している「試合結果」, 分析・評論が目的の「コラム」, 上記に分類できないバレーボール関連の記事である「その他」に分類して分析を行ったところ, 全記事中で占める割合が「試合結果」, 「コラム」, 「その他」の順で日本 (39.9%, 41.7%, 18.5%), ブラジル (17.2%, 57.4%, 25.4%), アメリカ (28.5%, 47.0%, 24.5%) となった. 「試合結果」に関して日本の割合が大きいのが特徴である.

本稿では誌面の都合で掲載できないが, 当日は他国に関する分析結果の詳細を発表する.

#### 【本研究のセールス・ポイント】

スポーツの報道に焦点を当てた研究は過去にあるが, バレーボールの報道に特化し研究されたものはない.

## 一般研究発表 演題番号 No.11

### 得点差によるバレーボールのゲーム展開の分類

○佐藤 文彦 (株式会社 DELTA)

【キーワード】 ゲーム展開, クラスタ分析

#### 【目的】

「8点先取した場合の勝率は72% (渡辺, 2012)」

こうした情報は、ゲームの中でどのような状況にあるのかを知るために重要な情報ではあるが、ゲーム展開のごく一部を切り出した情報に過ぎない。塚本(2000)はゲーム展開を、終始リードを許す「並行型」とサイドアウトを繰り返す「接戦型」に分類しているが、この2種類でバレーボールのゲーム展開を全て分類できるかには疑問が残る。

本研究の目的は、得点進行から生じる得点差から、ゲーム展開を分類することである。

#### 【方法】

Vプレミアリーグ2010/11大会から2013/14大会までの試合を、1から4セット(男子1321試合, 女子1306試合)と5セット(男子83試合, 女子97試合)を分析の対象とした。各セットで勝利したチームを基準にセット開始から終了までの得点差の推移を求めた。このデータをクラスタ分析(k平均法)によってそれぞれ6つのグループに分類、各グループの特徴から命名し、データ全体に占める割合を求めた。

#### 【結果と考察】

得点差の推移による分類の結果、男子の1から4セットでは、得点差が小さい範囲で推移する「接戦型」が全体の23.7%を、序盤から中盤にかけて広がった5点ほどの得点差をキープする「キープ型」が24.1%、徐々に得点差を広げていく「リード拡大型」が21.2%、最終的に10点ほどの差が開く「大差型」が6.3%、中盤で逆転する「中盤逆転型」が18.5%、終盤で逆転する「終盤逆転型」が17.8%であることがわかった。

この結果より、バレーボールのゲーム展開の全体像を確認できただけでなく、各セットの勝ち方、負け方の評価が可能となった。残りのデータは大会当日に報告する。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

先行研究では粗々としか扱われていなかったゲーム展開を、本研究ではより細分化して分析している。

## 一般研究発表 演題番号 No.12

### サイドプレイヤーにおける A クイックスパイク動作と平行スパイク動作の比較

○岩沢 恭牙 (筑波大学大学院), 秋山 央 (筑波大学), 五十嵐 元 (筑波大学),  
西田 誠 (筑波大学大学院), 中西 康己 (筑波大学)

【キーワード】動作分析、打点高、体幹角度、膝関節角度

#### 【目的】

初級者のバレーボールにおいては身体発達や技術レベルの向上にともなって、ポジションを変更することがある。そのため、同一選手がいろいろな種類のスパイク技能を習得することは有用なことであると考えられる。本研究では同一選手の A クイックスパイク (以下, A クイック) と平行スパイク (以下, 平行) について、バイオメカニクスの見地から比較検討することによって各スパイクの特徴を明らかにし、現場で指導する際の基礎資料を得ることを目的とした。

#### 【方法】

被験者は T 大学男子バレーボール部に所属する右利きのサイドプレイヤー 4 名 (身長:  $186.0 \pm 3.0$ cm, 体重:  $74.8 \pm 4.9$ kg, 経験年数:  $10.5 \pm 1.5$ 年) であった。A クイックはセッターのボール接触と同時に 2 歩目を踏み込むように、平行はボールがリリースされてから 2 歩目を踏み込むように指示し、その成功試技の基準を A クイックに関しては 0.1 秒、平行に関しては 0.5 秒とした。3 台のハイスピードデジタルカメラ (EXILIM EX-F1, CASIO 社製, 300HZ) を用いて撮影し、身体およびボール分析点の 3 次元座標値を求め、打点高、体幹の角度、(回旋, 屈曲伸展)、膝関節角度等を算出した。また、ステップイン (SI)、テイクオフ (TO)、テイクバック (TB)、インパクト (IMP) を基準に、SI から両足離地を踏切局面、TB から IMP までをフォワードスイング (FS) 局面と定義した。

#### 【結果及び考察】

打点高は、A クイック ( $3.03 \pm 0.06$ m) と平行 ( $3.00 \pm 0.05$ m) と大きな差はなかった。また 3 名の被験者で TB 時、IMP 時に体幹伸展角度が A クイックよりも平行の方が大きかった。この 3 名の結果の平均値を求めると、TB 時の体幹の回旋についての差は  $-19.4 \pm 7.4$ deg で、平行がより後方回旋が大きく、胸が開いた状態であったために IMP 時までには体幹のひねりを効果的に使うことができたと推察される。また、IMP 時の体幹屈曲伸展角度の差は、 $-16.5 \pm 3.06$ deg で平行の方が伸展が大きく、平行では IMP 時に体幹がやや反った状態であった。さらに、TO 時の膝関節角度の差は、右膝  $15.6 \pm 6.5$ deg, 左膝  $15.2 \pm 12.5$ deg で A クイックの方が右膝、左膝ともに屈曲が小さかった。しかし、A クイックでは膝の屈曲が小さいにも関わらず打点高に差がなかった。

#### 【結論】

平行と A クイックでは打点高に大差はなく、A クイックは TO 時に膝の屈曲が浅いこと、平行では TB 時に胸が開いており IMP 時に体幹がやや反っているという特徴が明らかになった。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

同一選手が複数のスパイク技能を習得するための基礎資料となることが期待できる。

## 一般研究発表 演題番号 No.13

### 1st テンポで攻撃参加するアタッカー人数が、アタックの成績に与える影響ならびに、ファーストタッチの返球位置との関係

○川村貴彦（株式会社意匠計画）、渡辺寿規（滋賀県立成人病センター）

【キーワード】スカウティング、スパイク、テンポ、ファーストタッチの返球位置、シンクロ攻撃

【背景】 昨年、北口・川村・手川・午坊らが報告したように、現在の世界男子トップチームの多くは、4人のアタッカーが1st テンポで攻撃参加する「同時多発位置差攻撃」を基本コンセプトとしている。このオフェンス戦術が効果的である理由は、ブロッカーに対して1st テンポで助走参加するアタッカーが「数的優位性」を発揮するためであると、一般に解釈されているが、同時多発位置差攻撃が実際のゲームにおいて、どの程度効果を発揮しているかを検証した、まとまった研究は過去に存在しない。また、多人数のアタッカーが1st テンポで攻撃参加するには、ファーストタッチをセッター定位置に正確に返球する必要がある、という意見がよく聞かれるが、世界トップチームがどのような返球位置から同時多発位置差攻撃を繰り出しているのかを検証した、まとまった研究も存在しない。

【目的】 1st テンポで攻撃参加するアタッカー人数とアタックの成績との関係ならびに、ファーストタッチの返球位置との関係を検証すること。

【方法】 2014年世界選手権男子決勝、ワールドカップ2015男子大会のアメリカ対ポーランド戦、2015年ワールドリーグ決勝で繰り出された、レセプションアタック全334本・トランジションアタック全179本を対象とし、攻撃参加したアタッカーのテンポと助走コース、ファーストタッチの返球位置を記録。各アタックを1st テンポで攻撃参加したアタッカー人数（4人(S4)、3人(S3)、2人(S2)、1人以下(S0)）で分類し、決定率・失点率・効果率と、ファーストタッチの返球位置の分布を比較した。

【結果と考察】 レセプションアタックの決定率は、S4・S3・S2・S0の順にそれぞれ64.8%・58.7%・48.6%・37.5%、失点率はそれぞれ13.9%・15.6%・17.1%・22.5%、効果率はそれぞれ50.9%・43.1%・31.4%・15.0%であり、人数が増えるほど決定率と効果率は上昇し、失点率は低下する傾向がみられた。これと似た傾向はトランジションアタックでも認められ、1st テンポで攻撃参加する人数がアタック成績に影響を持つ可能性が示唆された。一方、レセプションアタックにおけるS4は全132本中、58本(43.9%)がアタックライン寄りのゾーンから繰り出されていた。いわゆるセッター定位置とされる「スロット0のネット寄りのゾーン」に返球されたレセプションのうち、S4が繰り出されていたのは44.3%に過ぎず、むしろ「スロット0・Aのアタックライン寄りのゾーン」からの方が、高い割合（それぞれ65.6%・66.7%）でS4が繰り出されていた。

【本研究のセールス・ポイント】

三浦ら(2015)は、攻撃参加人数を含めた諸要因とアタック成績との関係を調べ、両者が相関しないことを報告している。しかしこの報告は、国内カテゴリでのゲームを分析対象としており、4人のアタッカーが1st テンポで攻撃参加する同時多発位置差攻撃を基本とする、世界男子トップチーム同士の試合を対象としたものではなかった。

1st テンポで攻撃参加するアタッカー人数が、アタック成績に影響することが示唆された本研究結果は、リードブロック戦術に対する同時多発位置差攻撃の効果を検証した、初めてのエビデンスである。

また昨今、「レセプション成功率とアタック決定率は相関しない」というエビデンスが一般にも浸透しつつある。高い決定率を示す同時多発位置差攻撃が、ネット際のいわゆるセッター定位置から、むしろ離れたゾーンから繰り出されていることが示された本研究結果は、このエビデンスの理論的背景の1つとなりうるものと考えられる。

## 一般研究発表 演題番号 No.14

### 中学生長身者合宿参加選手の心理的特徴 —調査実施年度からみた縦断的検討—

○池田 志織 (山梨学院大学), 遠藤 俊郎 (山梨学院大学), 安田 貢 (山梨学院大学),  
三井 勇 (山梨学院大学), 田中 博史 (大東文化大学), 横矢 勇一 (大東文化大学),  
飯塚 駿 (千葉県立船橋高等学校)

【キーワード】中学生, TSMI

スポーツ場面において、プレッシャーを跳ね除けて練習してきた成果を十分に発揮するには、自らのメンタルマネジメントを的確に行うことが重要である。そして、そのためには自らの心理的特徴を事前に知っておくことで、的確なメンタルマネジメントが可能になると考えられる。心理的要因を測定する心理的尺度として、TSMI(日本体育協会競技意欲検査)、MPI(モーズレイ性格検査)、SCAT(競技不安テスト)などが挙げられる。いずれも調査用紙によって測定をし、競技意欲、神経症的傾向、競技不安を測定するものである。これまで、バレーボール選手の心理的特徴については遠藤他(2012, 2013)の全日本中学生選抜選手についての検討や、全日本高校選抜選手を対象とした榎戸他(2013)、中高生の年代ごとに焦点を当てた池田他(2014)など、継続的に研究が進められている。しかし、これまでに調査年度の違いによる検討はなされておらず、選手の心理的特徴の傾向を探るためにも、過去と現在の同年代の心理的特徴を検討する必要があると考えられる。

本研究では、2014年度および2015年度の全日本中学生長身者選抜合宿参加バレーボール選手(2014年度91名, 2015年度94名, 計185名)を対象に調査を実施し、縦断的な心理的特徴を検討することを目的とした。調査実施に際しては、TSMI, MPI, SCATの3尺度にフェイスシートを加え、「バレーボール選手の競技に対する意識調査」として実施した。なお、分析にはフェイスシートとTSMIのデータのみを用いた。

2014年度と2015年度のTSMIの得点について独立二群間のt検定を行った結果、計画性( $t=3.02, p<.01$ ), コーチ受容( $t=2.79, p<.01$ )において2014年度の選手が2015年度の選手よりも有意に高い得点を示した。また、知的興味( $t=1.70, p<.1$ )においても2014年度の選手のほうが2015年度の選手よりも得点が高い傾向が見られた。なお、失敗不安( $t=1.67, p<.1$ ), 緊張性不安( $t=1.95, p<.1$ )においては2015年度の選手が2014年度の選手よりも高い傾向を示した。

これらの結果から、調査年度によって選手の心理的特徴の違いが明らかとなり、それにより選手自身のメンタルマネジメントや指導者の指導方法などに活用することができるものと思われる。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

本研究の対象である中学長身者選抜合宿参加バレーボール選手は、未来の日本代表を担うかもしれない貴重な選手たちである。本研究はトップレベルの中学生の心理的特徴を検討することで、日本バレーボール界の発展の一助となる資料を得ることを期待できる。

## 一般研究発表 演題番号 No.15

### ジャンプ動作時の床反力発生に関する力学的考察

○三村 泰成 (鶴岡高専)

---

【キーワード】 ジャンプ動作, 床反力, ニュートン力学, 伸張短縮サイクル

#### 【目的】

人間が垂直方向に跳ぶ時には、体重よりも大きな床反力を発生させ、その力積を鉛直方向速度に変換している。しかしながら、人間が「体重よりも大きな力」を下方向に負荷することは困難であるはずである。そこで本研究では、何が力学的に床反力を発生させているかを明らかにし、どのような動作が必須であるかを検討する。その結果、加速度、人体の質量バランスが大きな関りがあることが分かってきた。ジャンプ動作のメカニズムを議論するとき、伸張短縮サイクルなど神経、筋肉から説明することが多い。しかしながら、ジャンプ動作は純粋な力学現象でもあり、こちらからの検討が不十分であると著者は考えている。本研究では、なぜ、ジャンプ動作時に逆方向に身体を動かすのかを伸張短縮サイクルなどを用いなくても力学的に説明できることを示した。これによりジャンプ動作がどのような「力学現象」なのかを明らかにする。さらに、垂直跳び、スパイクジャンプ、ボックスジャンプなどの床反力を分析することにより、床反力を分析を用いた「ジャンプ動作の評価方法」も提案する。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

ジャンプ動作には、様々な要素が複雑に絡み合っている。本研究では、ジャンプという力学現象を考察することで、従来よりもシンプルな説明を試みる。

## 一般研究発表 演題番号 No.16

### バレーボールにおけるブロック動作時の体幹筋活動

○市川智之（早稲田大学スポーツ科学研究科）、松井泰二（早稲田大学スポーツ科学学術院）

【キーワード】 ブロック，体幹筋，空中局面，筋電

#### 【目的】

ブロックはディフェンスの第一線であり，相手攻撃を防ぐだけでなく，アタックコースの限定や打球速度を減少させる役割を有しており，非常に重要な技術とされる．また，ブロックの空中局面における姿勢保持についてのメカニズムを検証した研究は少ない．よって，本研究はその一部として体幹筋群に着目し，ブロック動作の体幹筋活動様式を明らかにすることで，ブロック指導の一助とすることを目的とした．

#### 【分析方法】

関東大学男子1部リーグに所属する男子バレーボール選手8名を対象とし，①垂直跳び，②ノーステップブロックジャンプ，③サイドステップ（右への移動），④サイドステップ（左への移動），⑤クロスステップ（右への移動），⑥クロスステップ（左への移動）の計6試技を行い，その際の筋電図および動作解析データを測定．被験筋は左右の腹直筋，外腹斜筋，内腹斜筋，脊柱起立筋の8chとした．

3台の赤外線カメラを使用し，実験試技の筋電図と同期させた動作解析データを取得．この動作解析データを用い，パワーポジション（大腿骨外側上顆のマーカが最も低くなった時点），離地（足尖マーカが床から離れた時点），着地（足尖のマーカが床に接した時点）を同定し，push-off phase（パワーポジション～離地），floating phase 前期（離地から着地までの時間を三分割した最初のphase），floating phase 中期（離地から着地までの時間を三分割した中間のphase），floating phase 後期（離地から着地までの時間を三分割した最後のphase）の4つにphase分けした．各phaseの筋活動量を算出し，試技条件とphase因子とした二元配置分散分析により比較検討した．

#### 【結果】

左外腹斜筋では，交互作用が認められ，push-off phaseのクロスステップ（左方向への移動， $67.8 \pm 18.2\%MVC$ ）及びクロスステップ（右方向への移動， $61.1 \pm 27.9\%MVC$ ）の活動量が，他の全てのphase・試技の活動量よりも有意に大きい値を示した．

他の筋では，phase間の単純主効果が認められ，push-off phaseの筋活動量は他のphaseの活動量より有意に大きな値を示した．さらに腹筋群では，floating phase中期の活動量がpush-off phaseやfloating phase前期より有意に小さい値を示した．

#### 【本研究のセールス・ポイント】

ブロックジャンプの一連の動作を筋電図と同期させた動作解析データを取得したこと．

本研究は基礎研究であるため，今回の実験は研究室に留まっており，ブロック技術がオープンスキルという特性を有することから，今後は相手からの攻撃を想定した実験を検討することで研究に継続性・発展性があること．



## 一般研究発表 演題番号 No.17

### チームスポーツと笑いの関係 ～笑いが選手のモチベーションにもたらす影響～

○飯塚駿（千葉県立船橋高等学校），遠藤俊郎（山梨学院大学），池田志織（山梨学院大学），  
田中博史（大東文化大学），横矢勇一（大東文化大学）

【キーワード】 笑い POMS メンタルマネジメント

#### 【抄録】

本研究は、秋季関東および関東大学バレーボール連盟2部リーグに所属する男子バレーボール部を対象に、普段のバレーボールの練習や試合中において選手の意図的な笑い、またその笑いがチームにとってどのような影響をもたらしているか調査を実施し、チームスポーツと笑いの関係性を検証することによって、メンタルマネジメント及びチームのモチベーション向上に役立つための資料を得ることを目的とした。

平成28年度（秋季関東大学バレーボール連盟2部リーグに所属する）男子9チーム（269名）に対しフェイスシート及び笑いに関する20項目（遠藤，2000）、POMS短縮版を用いて調査を実施した結果、分析対象は記入漏れを除いた有効回答173名（平均年齢19.80歳）であった。笑い尺度との検討では、「生理的ストレス因子」は、2・3年生間において有意な差がみられ（ $f=3.08, p<0.05$ ）、2年生は他学年に比べ生理的なストレスを感じている選手が少なかった。また、笑い尺度における立場間の有意な差はみられず、どの因子も同様な結果であった。POMSテスト短縮版との検討においては、V（活気）における学年間において、2年生の数値（9.87%）が他の学年と比べると高かった。また立場間の有意な差はみられなかったが、控え選手のVの値が、実際に試合に出ているレギュラー選手の値より高い値を示したことからレギュラーになるためモチベーションを高く持って競技生活を送っている事が窺えた。POMSと笑い尺度の相関関係において、笑い尺度のリフレッシュ因子が高ければPOMSのネガティブ因子であるD（抑うつ）とAH（緊張—不安）は低く、ポジティブ因子であるV（活気）は高くなるということが示唆され、笑い尺度の生理的ストレス因子が高ければ、POMSのV（活気）は低くなるということが明らかになったことから、競技におけるストレスと笑いには密接な関係があることが推察される。このことから、バレーボールにおいて、笑いはメンタルマネジメントの向上やチームパフォーマンスの向上に肯定的な効果が期待されることが窺えた。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

笑いに関するチームパフォーマンスの向上の研究は数少ないため重要な知見である。

## 一般研究発表 演題番号 No.18

### ディグフォーメーションがディフェンスに及ぼす影響に関する検討 - 2014年世界選手権女子決勝 中国チームのデータから -

○縄田亮太（愛知教育大学）， 大澤仁（香川大学農学部）

【キーワード】 ディグフォーメーション、スカウティング

#### 【背景】

FIVBの「Picture of the Game - 2015」によれば、World League finalsにおいて、1本のアタックで終わるラリーの割合が、2006年から2015年までに10%ほど低下していることを報告しており、この10年ほどでアタックが決まりづらくなったことを示している。この背景には、アタックに対するディグフォーメーションの進化が考えられる。しかし、ディグフォーメーションを解説している資料は少なくはないが、FIVBの指摘する時代による変化を踏まえた現在のバレーボールチームが、実際の試合でどのようなフォーメーションを取っており、どのような効果をあげているのかという報告はされていない。そのため、現在の世界のトップチームが、所謂教科書通りのディグフォーメーションをとっているのか、それとも別の方法論を用いているのか定かではない。

#### 【目的】

世界女子トップチームが、アタックに対してどのようなディフェンス戦略を採用しているかを確認し、その戦略の効果を検証すること。

#### 【方法】

分析対象は、2014年世界選手権女子決勝、中国対アメリカ戦の中国チーム。対戦相手のアメリカが繰り出したレセプションアタックを、攻撃に参加したアタッカーの人数ならびに、実際にボールヒットを行ったアタッカーのスポット位置で分類し、各状況においてボールヒットのタイミングで、ブロッカーならびにディガーがどのような位置関係を形成しているかを検証した。

#### 【結果と考察】

攻撃参加するアタッカーの人数が3人以上の状況と、2人以下の状況では、ボールヒットを行ったアタッカーのスポット位置によって、スパイク効果率に大きな差が見られた。3人以上ではスポット位置によって、大きな違いはなかった（33%～39%）が、2人以下では、スポット4・5（ライト）は100%、スポット0～3およびA（センター）は40%、スポットB・C（レフト）は-30%であった。一方で、スポット位置によって、ディガーの配置に大きな違いは見られず、基本的にはどのスポット位置からでも、ボックスフォーメーションで対応をしていた。つまり、この結果はディガーの配置がスパイク効果率に及ぼす影響が小さいことを示している。これら結果より、2人以下の状況では、レフトからの攻撃を効果的に防いでいたが、その効果はディガーの配置によるものではなく、ブロックの影響であることが示唆された。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

先行研究では測定されてこなかったディグフォーメーションを記録し、集計したことが本研究のポイントである。

## 一般研究発表 演題番号 No.19

### ブロックのポジショニングがディフェンスに及ぼす影響に関する検討 - 2015年ワールドカップ男子 ポーランドチームのデータから -

○百生 剣太 (KouKen 株式会社), 渡辺 寿規 (滋賀県立成人病センター)

【キーワード】 スカウティング, ブロック

#### 【目的】

現代のバレーボールにおいてブロックは、個人の読みや勘ではなく、チーム戦術として連係が求められる。小林ら (2013) は、相手コンビネーションに対するブロックのポジショニングとその効果を報告しているが、コンビネーションをマイナステンポの MB + もう 1 人のアタッカーという 2 人のアタッカーの組み合わせから分類している。しかし現在のトップカテゴリでは、さらに 3 人目、4 人目のアタッカーも攻撃参加するのが主流である。そこで本研究では、先行研究のコンビネーションを拡大し、ブロックのポジショニングとその効果を検証することを目的とした。

#### 【方法】

分析対象は 2015 年のワールドカップ男子、アメリカ対ポーランド戦のポーランドチーム。相手チームのレセプションアタックに対するディフェンス (1st トランジション) の状況を対象として、セットアップのタイミングで各ブロッカーが構えるスロット位置 (自コート of レフト側から 5, 4, 3, 2, 1, 0, A, B, C) を記録し、その組み合わせ (ブロックシフト) のパターンを分類。各ブロックシフトごとの効果を検証した。

#### 【結果と考察】

ブロックシフトはバンチが最も多く、全体の 62.5% を占めていた。他に、レフトデディケートが 16.7%、ライトブロッカーリリースが 14.6%、その他のシフトが 6.3% であった。バンチが多数を占める傾向は、1st テンポで攻撃参加する相手のアタッカー人数に関わらず、ほぼ同様であった。このことから、チームの基本的なブロック戦術としてバンチシフトを採用していると考えられる。また、スプレッドシフトを用いたシーンは 1 度も見る事ができなかった。次に、複数のアタッカーが 1st テンポで攻撃参加したアタックに対して、バンチを用いたケースに絞って分析。ボールヒット位置により「サイド (スロット 5, 4, B, C)」と「ミドル (スロット 3 ~ A)」の 2 つに区分し、それぞれの結果 (自チームの得点, ラリー継続, 自チームの失点) の割合をみると、「サイド」は 17.6%、35.3%、47.1%、「ミドル」は 0.0%、40.0%、60.0% であった。一般にバンチシフトは、「ミドル」からの攻撃に効果的で「サイド」からの 1st テンポに対応しづらいシフトであると言われるが、ポーランドはこの試合において「ミドル」よりも「サイド」からの攻撃に対し失点率を低く抑えることに成功しており、バンチを用いても「サイド」からの攻撃へのディフェンスを機能させることが可能であると考えられる。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

本研究のポイントは、先行研究のコンビネーションの分類を、世界標準に即した分類に修正したところである。

## 一般研究発表 演題番号 No.20

### Vリーグ機構準加盟承認「ヴォレアス北海道」設立にみる影響と今後

○永谷 稔（北翔大学），

春間 好実（東海大学札幌キャンパス・一般社団法人北海道バレーボールクラブ）

【キーワード】 Vリーグ機構 準加盟 承認 ヴォレアス北海道 設立

【目的】 本研究は、2016年12月末にVリーグ機構に準加盟が認められた、北海道における新設チームであるヴォレアス北海道について、その設立経緯や現状を明らかにするものである。また、その影響、今後の課題について知見を得るものである。

Vリーグ機構における準加盟規程は、Vリーグ機構への加入を目指すチームに門戸を広げ（中略）将来の加入を円滑に進めることと、トップリーグへの夢を持つチームを増やし、底辺の拡大と普及発展を目指すことを目的とするために、2008年4月に施行された。これまでに14チームが認められ、うち3チームがチャレンジリーグ昇格を果たしている。

今後、ヴォレアス北海道のプレミアやチャレンジリーグへの昇格はもとより、チームとして安定的運営が期待される。そのためには、どのような活動が求められているのか、さらには、北海道内のバレーボール人口拡大や競技力向上に対する寄与、地域活性や地域貢献など、数多くの期待に対してどのように応えていくべきなのか、各関係者からのヒアリング及び先行事例から明らかにするものである。

【方法】 ヴォレアス北海道チーム関係者、北海道内各カテゴリーに所属するバレーボール関係者からのヒアリングにより設立経緯や現状を明らかにする。また、先行準加盟チーム、北海道内先行設立スポーツチームとの比較を行い、今後の課題を検討するものである。

【結果概要と考察】 ヴォレアス北海道は、クラブチームであるアイ・ディー・エフが母体となり2016年10月に設立された、一般社団法人北海道バレーボールクラブのチームである。アイ・ディー・エフとしては2011年に旭川市で結成され、全国大会出場実績もある。また、バレーボール教室の開催など指導普及に努め、何より雇用の創出として、地域貢献の実績が大きい。北海道内各カテゴリー関係者によると、道内選手の目標となったり、Vリーグが身近に感じられるなど、好意的である。プロスポーツとはビジネスモデルも異なるため、財政的基盤はもちろん、関係者だけでなく、いかに広く地域に根ざす体制をつくるかが、鍵となる。

【本研究のセールス・ポイント】 現在、Vリーグ機構へ加盟しているチームはプレミアリーグ男女各8チーム計16チーム、チャレンジリーグI男女各8チーム計16チーム、チャレンジリーグII男子8チームうち3チームが準加盟、女子5チームうち3チームが準加盟計13チーム、総計45チームである。準加盟チームは先の男女6チームに加え、ヴォレアス北海道とヴィアティン三重の2チームが追加されることとなる。加盟承認の過程は規程に則り行われるものであるが、やはりチームを新設し、加盟申請を行うに至る経緯については非常に興味深く、今後の参考になるものである。

準加盟後、1シーズンを経てチャレンジリーグ昇格するチームもあれば、準加盟のままのチームもあり、取り消しとなったチームも存在する。バレーボールのリーグ戦は、プロ野球やJリーグと違い、ホームゲーム数が圧倒的に少なく、最も試合数が多いプレミアリーグでも30試合前後である。バスケットボールの新リーグBリーグでは年間60試合のレギュラーシーズンに加え、プレーオフを行う。したがって、試合を興行することで得られる利益や収入は意外と少なく、Vリーグ機構に加盟をすることは、ヴォレアス北海道にとっては、どのようなことなのか、比較検討する中で明らかにされている。

また、こうしたチームを設立することに対する、周辺の影響も明らかにしておくことで、今後の運営に対する知見が得られるものである。Vリーグがスーパーリーグ構想を発表し、そのなかでは、国際競技力の低下や競技人口の減少、ホームゲーム開催数の少なさに起因する自治体（ホームタウン）との一体感不足などを指摘している。また、参入運営母体は、原則として独立した法人でなければならず、現在のVプレミアリーグチームの多くが一企業を母体とするチームである。こうした先行きも見越しながら、しかしながら、運営の安定が何より重要となることから、ヴォレアス北海道の活動に対して何らかの貢献や寄与するものであることを期待する。

## 一般研究発表 演題番号 No.21

### 世界一流男子バレーボール選手のスパイク動作 — FIVB ワールドカップ 2015 男子大会において —

○村本名史 (常葉大学), 中井 聖 (京都光華女子大学), 栗田泰成 (常葉大学),  
高根信吾 (常葉大学), 瀧澤寛路 (常葉大学), 塚本博之 (静岡産業大学), 河合 学 (静岡大学)

【キーワード】 スパイク動作、世界一流男子選手、3次元動作解析

#### 【目的】

FIVB ワールドカップ 2015 男子大会に出場したバレーボール選手のスパイク動作を3次元解析することにより、世界一流男子バレーボール選手のスパイク動作の特徴について検討した。

#### 【方法】

浜松会場で試合を実施した Iran、Poland、Russia、Argentina、Tunisia、Venezuela の計 8 名の男子選手 ( $26.2 \pm 1.5$  yrs、 $201.0 \pm 10.0$  cm、 $89.3 \pm 11.3$  kg) の試合中のスパイク動作を分析対象とした。前衛レフトからのミスにならなかったスパイク動作のうち、選手の動作特徴が判別しやすいと判断したものを分析した。撮影には試合会場 3 階に設置した 3 台のデジタルカメラ (JVC ケンウッド社製スポーツコーチングカム) を使用し、無線で同期させ、撮影速度 240fps、シャッター速度  $1/1000$  sec で撮影した。選手の身体各部位の計測点の 3 次元座標値を DLT 法によって算出するため、試合開始前にレフトサイドのフロントゾーン ( $3\text{m} \times 3\text{m}$  の区画) 内に 1m 間隔で計 16 か所にキャリブレーションポール (高さ 4m、コントロールポイント 6 個) を鉛直に立てて撮影した。なお、身体の計測点は 20 ポイント (頭頂、胸骨上縁、肩、肘、手首、手先、肋骨下、大転子、膝、足首、足先) とし、各計測点の座標算出には動作解析ソフト (DKH 社製 FrameDIAS V) を用い、バターワース型ローパスフィルタによって 20Hz 以上の高周波を遮断した。さらに、頭部、胴体、上腕、前腕、手部、大腿、下腿、足部の各セグメントを設定し、各セグメントの重心および身体合成重心座標を算出した。打撃した手部 (以下、打撃手) および身体合成重心の XYZ 方向の合成速度をそれぞれの速度、Z 方向の変位をそれぞれの高さとした。

#### 【結果】

ボールのインパクト時における打撃手の速度は  $39.61 \pm 4.15$  m/s、打撃手高は  $3.26 \pm 0.15$  m であった。また、スパイク動作中の身体合成重心高は、離床時が  $1.34 \pm 0.10$  m、インパクト時が  $2.05 \pm 0.06$  m、最高値は  $2.05 \pm 0.07$  m であった。さらに、スパイク動作中の身体合成重心速度は、離床時が  $7.25 \pm 0.86$  m/s、インパクト時が  $3.68 \pm 1.25$  m/s、着床時が  $7.64 \pm 1.14$  m/s であった。

#### 【謝辞】

本研究は平成 27 年度 公益財団法人日本バレーボール協会強化事業本部科学研究委員会事業の成果の一部である。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

FIVB ワールドカップ 2015 男子大会における男子バレーボール選手のスパイク動作を 3 次元解析することにより、世界一流男子バレーボール選手のスパイク動作の特徴を明らかにすることが期待できる。

## 一般研究発表 演題番号 No.22

### ブロックのポジショニングがディフェンスに及ぼす影響に関する検討 - 2014年世界選手権男子決勝 ポーランドチームのデータから -

○垣花 実樹 (沖縄国際大学 総合文化学部), 川村 貴彦 (株式会社意匠計画)

【キーワード】 スカウティング, ブロック

#### 【目的】

現代のバレーボールにおいてブロックは、個人の読みや勘ではなく、チーム戦術として連係が求められる。小林ら(2013)は、相手コンビネーションに対するブロックのポジショニングとその効果を報告しているが、コンビネーションをマイナステンポのMB + もう1人のアタッカーという2人のアタッカーの組み合わせから分類している。しかし、現在のトップカテゴリでは、さらに3人目、4人目のアタッカーも攻撃に参加してくるのが主流である。そこで本研究では、先行研究のコンビネーションを拡大し、ブロックのポジショニングとその効果を検証することを目的とした。

#### 【方法】

分析対象は、2014年の世界選手権男子決勝、ポーランド対ブラジル戦のポーランドチーム。この試合の、相手チームのレセプションアタックに対するディフェンス(1st トランジション)の状況を対象に、ブロッカーのポジショニングを記録し、その組み合わせ(ブロックシフト)のパターンを分類。各ブロックシフトごとの効果を検証した。

#### 【結果と考察】

ブロックシフトは「バンチ」が最も多く、全体の76.9%を占めていた。他に「レフトデディケート」が9.2%、「ライトデディケート」が3.1%、その他のシフトが10.8%であった。このことから、チームの基本的なブロック戦術として「バンチシフト」を採用していると考えられる。また「スプレッドシフト」を用いたシーンは、1度も見ることはできなかった。

1st テンポで攻撃参加したアタッカー人数別でバンチシフトの割合を見ると、「4人」のときは76.5%、「3人」のときは83.3%、「2人」のときは80.0%、「1人以下」のときは42.9%となっており、「バンチ以外のシフト」は主に、アタッカーの選択肢に限られる状況で使用されていた。

ブロックシフトごとのプレー結果は、「バンチ」が自チーム得点12.0%、ラリー継続22.0%、自チーム失点54.0%、「バンチ以外のシフト」が自チーム得点0.0%、ラリー継続46.7%、自チーム失点53.3%であった。基本的なブロック戦術として採用されていた「バンチシフト」は、アタッカーの選択肢が限られ、失点期待値の低い状況で使用されていた「バンチ以外のシフト」と比べても遜色ない結果を残しており、効果的であったと考えられる。

#### 【本研究のセールス・ポイント】

本研究のポイントは、先行研究のコンビネーションの分類を、世界標準に即した分類に修正したところである。

## 一般研究発表 演題番号 No.23

### 課外活動指導者の負担とその解決策 -A 中学校バレーボール部の外部指導者導入に着目して-

○岡田 拓真（びわこ成蹊スポーツ大学4年生）、鳥羽 賢二（びわこ成蹊スポーツ大学）

---

【キーワード】 課外活動指導者，教員の負担増，外部指導者導入

近年，教員の多忙化が大きな社会問題となっている．生徒ひとりずつの学習指導や生活指導以外にも，校務分掌事務などを担当しており，教員一人で複数の職務や役割を果たさなければならないという状況になっている．加えて，課外活動を担当する教員は，そうした業務以外での勤務超過となり，ワークライフバランスを取ることが困難になっていると聞く．

こうした状況の中，特に問題視されている課外活動指導者に本研究では着目する．筆者自身がA中学校の男子バレーボール部で外部指導者を日常的に実践しており，そこで中学校の課外活動にスポットを当てることにした．課外活動における教員と，その負担を軽減するための方策として導入された外部指導者の双方に焦点を当て，その望ましい解決方法を検討する．

本研究で得られた知見は今後，中学校の課外活動というフィールドを超え，スポーツ少年団，総合型地域スポーツクラブ，体育の授業，文化課外活動などの外部の人材の活用が求められる分野への汎用ができると考えられる．

【本研究のセールス・ポイント】

大津市A中学校に，外部指導者として実践的活動を伴っており，そこでのフィールドリサーチをもとに研究テーマにアプローチしている．

## オンコートレクチャー



中央大学 監督 (外部派遣)

松 永 理 生 氏

### 〈経 歴〉

1999年～2001年  
京都私立東山高等学校  
2001年～2004年  
中央大学  
2004年～2007年  
パナソニック株式会社 (旧松下電器産業株式会社)  
2007年～2017年  
豊田合成株式会社  
(2012年より中央大学に出向)

### 〈指導歴〉

2007年  
全日本女子コーチ  
2010年～2011年  
豊田合成トレフェルサ  
選手兼コーチ(2010年)  
コーチ専任 (2011年)  
2012年～2017年  
中央大学 監督

## “自ら考え、自ら行動する力をつける Individual leadership”

2020年の東京オリンピックに向けて、我々のようなアンダーカテゴリーを指導する立場の者に課せられた課題は、人間育成（人間力）という自立をした人間を多く輩出することにあると考えます。プレーヤーとしても一人の企業人としてもそうであるが、自ら考え自ら行動する力を身に着けることが非常に大切である。それが、アンダーカテゴリー、特に大学というジャンルの命題であると私は考えます。そういった自立を促し、自ら考え自ら行動する選手を育成するために、私は普段の大学での練習では、まずはやってみよう！と思える練習方法を考え実施ししています。キーワードは“ゲーム”です。ゲームと言われるものは常に競うもの、クリアするものなどあり、遊びといわれるところに多く聞かれます。そういった遊びにある熱中できる要素を大事にしたゲーム性の高い練習を常に模索しています。今回は普段大学の練習で実施している内容を私が考える理論とを交えながら、ゲーム性のある練習メニューと、シンプルだが非常に重要性の高いスキルアップ練習などをオンコートレクチャーでご紹介できればと思います。益々、日本のバレー界が良くなり、若い世代が夢を持てる競技であり続けるために、これからも私たちは精進していかなければならないと思っています。



## 入会案内

### ◆日本バレーボール学会への入会について

#### 1. 学会のコンセプト

日本バレーボール学会は、これまでのバレーボールに関する研究を体系化すると共に、情報交換の場の設定等を通じて新たなバレーボール学の構築を目指しております。1996年にバレーボール研究会を発足させ、ついで1999年には名称をバレーボール学会へと発展的に改め、2009年に国際的な連携を考慮し、日本バレーボール学会と改め、今日に至っております。今後もバレーボールを科学的な側面から研究すること、バレーボールのコーチングの場で役に立つ情報の提供等を行い、バレーボールの普及・強化のために資することができるように、より積極的・活発な活動を展開します。

#### 2. 入会手続き

当日、日本バレーボール学会への入会手続きを行うことができます。ご希望の方は受付でお尋ねください。受付にて「日本バレーボール学会入会申込用紙」に記入の上、年会費（5,000円）をお支払いください。その時点で日本バレーボール学会ホームページからの申込みあるいは申込用紙の内容項目を記述したE-mailでも申し込み可能です。その後、郵便局の振込用紙にて年会費（5,000円）をお振込みください。入金が確認された時点で日本バレーボール学会会員となります。

#### 日本バレーボール学会 事務局

住所：〒417-0801 静岡県富士市大淵325 常葉大学 高根研究室内

Tel&Fax 0545-37-2128

E-mail : jsvr@asu.ac.jp ホームページ : <http://www.jsvr.org>

振込先：郵便局 口座番号：00240-2-66791 口座名称：日本バレーボール学会

なお、入会後の年会費については口座自動引き落としの手続きを進めておりますので、入会后事務局からの預金口座振替依頼書を送付します。預金口座振替依頼書に必要事項をご記入・押印の上、日本バレーボール学会事務局までご返送ください。

## 協賛企業・団体一覧

- 株式会社アシックス
- 株式会社イーブイ・プラネット
- 株式会社クレーマージャパン
- 学校法人国士舘
- ジャパンライム株式会社
- Sports shop Ryo
- 株式会社スポーツセンシング
- 竹井機器工業株式会社
- 長永スポーツ工業株式会社
- 株式会社ディケイエイチ
- 医療法人社団 天宣会 柏エンゼルクロス
- 東武トップツアーズ株式会社
- 日勝スポーツ工業株式会社
- 日本文化出版 月刊バレーボール
- 久光製薬株式会社

(五十音順)